

信ちゃんの昔話 第四部

ムダンサ(引越し)と移民

沼田信一著



移民の子移転つづきで古巣なし 読人不知

転耕と言えど夜逃げをして来たる 波津 まさと

序

牛窪 襄

“信ちゃんの昔話”が、早くも十部迄書き上ったので
と言って送って来た。従って次々と発刊される予定である
かも知れないが、他人事ながらその印刷費も大変であろう
と思う。

私は漫画挿画を引き受けたので読んでみたが実に面白い、
つい魅かれて全部読破した。

コロニヤには自分史を書いた人は多々居るが、こうした
“実話、開拓裏面史”は少ない。

その昔、望郷の念にむせびながら、錦衣帰国の夢は破れたが、
何とかして故郷に帰りたい心を支えに、言葉の通じない、
不自由な貧乏な生活に耐え抜いてきた苦闘の物語、
失敗あり、涙あり、お笑いあり、先人の汗が肌に伝ってくる
コロニヤの物語を、見たまま、感じたまま、聞いたままを飾らず、
素直に書かれているのが、実感を呼んで魅きつけるのであろう。

一般諸賢の一読あらん事をお勧めしたい。

沼田氏は十余年にわたって。パラナ日伯文化連合会の相談
役であり、ロンドリーナ市の名誉市民権を受けている。ロ
ンドリーナ入植は一九三四年、十六才の少年であったとい
われるが良く記憶されていたものである。

―面白い―珍しい―信ちゃんの昔話

ブラジル・モラロジ―研究協会理事長

モジ・ダス・クル―ゼス イピランガ病院々長

森 昇

沼田君の「信ちゃんの昔話」が、何んでも十冊の原稿が書き上つているとの事であるが印刷は三冊でやめたいと聞いて、一寸淋しい思いをしていた。沼田君の昔話の様な移民の裏話を書いた本は少ない。安いピンガに慰められてどれだけ鍬を引き、小さな体でジャングルの開拓に立向った事か、毒蛇や落雷で命を落してはいられないと不安の中に汗を流して頑張った移民の裏話が赤裸々に書かれています。引き付ける「信ちゃんの昔話」がここに第四部の発行になつた事を喜び、一般諸賢に於かれましても御一読下さる様おすすめる次第であります。

氏は私たちの会の登録以来の副理事長であり、又、ロンドリーナ・ゴルフ・クラブの創立者でもあります。

第四部『ムダンサと移民』の発刊を祝して

パラナ日伯文化連合会

名誉会長 福島 正登

沼田信一氏の昔話第一部カフエと移民、第二部ピングガと移民、第三部毒蛇と移民と、八十九年にわたる日本移民の赤裸々な移民の裏話を読まさせて頂き、まったく実感する者であります。

第四部はムダンサと移民と聞き、これも移民のさけられないことでありました。

私は二十回もムダンサした人を何人か知っております。良かったら転々とする必要はなかったと思う。それには大変な苦労があったと思う。定住出来ずに二、三年で新しいところへ移りろくな家も作れずあばら家を転々とした事がつづられる事を期待し楽しみに待つて居ます。皆様にも是非一読をおすすめ致します。

沼田氏がよくも続々と六〇年前のことを記憶され又公の役職を多くもたれ多忙の身でありながらがんばっておられること感服致します。

氏は特に三世四世への教育に尽力され、パラナ日伯連合会のモデル校の教育委員長であり、モデル校の機材は氏の寄贈によるものが多くあります。氏の益々の健康を祈り『ムダンサと移民』を期待しまして発刊のお祝いの言葉と致します。

序

パラナ日伯文化連合会 会長

嶋田 巧

日伯修好百年記念の年を送り、引続いて天皇皇后両陛下
ご来伯の年、全ブラジル日系移民には一生涯忘れる事の出
来ない記念の年に、「カフエーと移民」から初まった珍し
い移民の裏面史が「ピングアと移民」「毒蛇と移民」と続け、
今ここに「ムダンサ（引越し）と移民」と題してその第四
部を発刊されます沼田信一氏におかれましては、人生最大
のお喜びでないかと感じられ、あらためて敬意を表しま
す。

約九十年前移住してこられた一世の方々は、苦勞と努力
と、闘士としての精神があつたればこそ、現在の日系社会
があるのだと信じます。

望郷の淋しさをピングアでまぎらわし、食生活の貧しさか
らトカゲあるいはタツノの肉を食べたエピソードは、沼田
信一氏の第一部・第二部にと、表現良く記されていて、私
共二世、三世の幼年時代のおぼろげの記憶を呼び起こして
下さった貴重な財産だと信ずるものであります。

現在のブラジルにおかれては、特に農業又は各方面の経
済状態も決して良いとは言われず、多数の日系人が日本へ
と将来の希望に燃えて働きに行っている反面、ブラジル日

系社全では、本年程立派な成績で、市長並びに市会議員と政界に進出した人数は、移民史始めての喜びの年でありました。

この様な日系社会の発展の陰には、先輩移民の辛苦があつたればこそで、その記録を沼田信一氏は二世、三世にも判りやすくユーモアたっぷりに表現して、年老いた一世移民をいたわりつつ、昔の実際にあつた話を通じて生活に励ましを与えて下さっている心に深く感謝申し上げますと共に、一般諸賢の一読あらん事をおすすめる次第であります。

尚沼田氏は、我がパラナ日伯文化連合会の相談役であると共に、我が会の運営する日本語学校の教育委員長でもあります。

はしがき

沼田信一

” 第三部 ” 「毒蛇と移民」を印刷してみると、方々から、色々な反響があつて、毒蛇で恐ろしい思いをしたのは私たちだけでない事が良く解りました。時々逢うお婆ちゃん、今回序文を頂いたパラナ日伯文化連合会の現会長長嶋田氏のお婆ちゃんも若い時、荒山で働いていて、倒れていた木をまたぐと、向う側にいた毒蛇をふんだ。チカ、チカ、チカッ

と何回も咬まれた。血清は間に合って助かったのではあるがドス黒くハレルだけ腫れ上って、大変に怖ろしい思いをしたとの事である。

今回の第四部では、ファゼンダ（耕地）に配耕された移民は、義務農年さえ勤められない事情がおきて夜逃げをしたり、罰金を払って転耕する様な事情もおきてきたりして、兎に角転々と移転された人が多いのである。棚もタンスもなければ、ミリーヨ（トウモロコシ）の皮をがさがさと詰めたフトンを丸めて、小さな馬車一台に積み込み、ホーキの柄か何かに鶏を五・六羽ブラ下げて、その後から元の布地が分らない程ツギの当たったシャツやズボンを着た家族がトボトボと歩いてのムダンサのあの姿は今では見られなくなった。あの時の主人の気持、主婦の心の中はどうであったか、今度は今度はと、五回、十回とムダンサ（移転）をした当時を今一度振り返って見る事も亦、懐かしさを誘うばかりでなく、無駄ではないと思う。

私はブラジル移民を語る時このムダンサの多かった事をはずされないと思う。

その様な気持ちで読んで頂かれると幸と存じます。

尚、此の第四部発刊に際しましても、前回同様、牛窪氏、ドットール森、福島氏の三氏に更に現。パラナ日伯文化連合会会長の嶋田巧氏の身に余る序文を頂きまして、巻頭を飾る事のできました事を厚く御礼申し上げます。

特に牛窪氏にはたのしい表紙や挿画を書いて頂きまして重ねて御礼申し上げます。

目次

装帳と漫画……牛窪 襄

表紙説明・川柳

(移民の子移転つづきで古巢なし)……読人 不知
(転耕と言えど夜逃げをして来たる)……浜津まさを

序 : 牛窪 襄

面白い・珍しい 信ちゃんの昔話 ……森 昇

第四部『ムダンサと移民』の発刊を祝して・福島 正登

序 ; ……嶋田 巧

はしがき ; ……沼田 信一

| | | |
|------|------------------|-----|
| 第一話 | ムダンサと移民 (1) | 1 0 |
| 第二話 | ムダンサと移民 (2) | 1 4 |
| 第三話 | ムダンサと移民 (3) | 1 8 |
| 第四話 | 移住翌年 我が家のムダンサ | 2 1 |
| 第五話 | 続・移住翌年我が家のムダンサ : | 2 5 |
| 第六話 | 低かった労働賃金 | 3 1 |
| 第七話 | お菓子・ | 3 7 |
| 第八話 | 歩いて野球遠征 ; | 4 1 |
| 第九話 | チバジ―の石橋が落ちる | 4 4 |
| 第十話 | 見当ちがい | 4 7 |
| 第十一話 | コロニヤのコレクション | 5 0 |

| | | |
|-------|-------------|----|
| 第十二話 | 木を切る危険・ | 5 |
| 第十三話 | 収穫祝 | 5 |
| 第十四話 | 母の哲学： | 5 |
| 第十五話 | フアロレットの明りでは | 6 |
| 第十六話 | 入植拾周年祝典……… | 6 |
| 第十七話 | 帽子と靴： | 6 |
| 第十八話 | 龍 卷： | 7 |
| 第十九話 | 物の値だん： | 7 |
| 第二十話 | あの優勝旗はどこに： | 7 |
| 第二十一話 | ヨーロッパ人の一面 | 8 |
| 第二十二話 | 動物愛護： | 8 |
| 第二十三話 | ジャボチカーバ | 8 |
| 第二十四話 | 一番良い方法・ | 9 |
| 第二十五話 | 中央区のグラント作り： | 9 |
| 第二十六話 | 汽車の旅 | 9 |
| 第二十七話 | 省三君の一面 | 10 |
| 第二十八話 | 迷信： | 10 |
| 第二十九話 | 喧嘩 | 11 |
| 第三十話 | 男泣き | 11 |

あとがき……

1
1
7

第一話

ムダンサ（移転）と移民（1）

私達が移住して来た頃、既に在伯十年、十五年という人がいて、がっかりした事がある。此方は数年か、長くとも十年後には一儲けして帰国するつもりでいるのに此の人達何をしていたのか、ブラジルとは案外に儲からない処なのかと考えさせられたが、二、三年すると割合に金が入って来るので楽しかった。

それはパラナのテーラ・ロツシヤ地帯の恩恵であったので、此処へ来る迄には一般の人は相当に苦勞したらしいのである。

先ず、かさと丸移民であるが、ズモーン農場に配耕された五十二家族は二ヶ月足らずで全員サンパウロ移民收容所に戻ったという事であった。

カナーン農場の場合は同じく不作の年で収穫は手間賃にならず、主にサントスの港の方が賃銀が良かろうと二ヶ月前後から逃亡が続いたと言われている。

フロレスタ農場の場合、逃亡する者数家族、残りの者は翌年耕主と争いになり全員移動したという。然しそうはいつても、先輩移民のいない時代の事であるから、大変である。言葉も適じないのに家族を抱えて、どこへ移転するのか、不安な事であったろう。

又、サン・マルチーニョ農場には主に鹿児島県人二十七

家族が入ったが、間もなく十二家族、四十二、三人が退耕したといい、グワタパラー農場では鹿児島県人十八家族、高知県人二家族、新潟県人三家族、計二十三家族を通訳平野運平氏が同道して行かれて、此処は平野氏の努力で良く落ち着いた処とされているが、それでも翌年には残留者四割以下に減っていたそうである。

ソブラード農場の場合は仁平嵩氏が山口県人九家族、愛媛県人六家族、計十五家族同道したそうであるが、ここは割合に良くてズモーン耕地から移動した者も相当あったらしい、然し初期にはやはり数家族は逃亡したとの事である。

以上の様に移民は食えないのでは仕方がない。儲からないのではかなわない、何んとかもう少し良い所が無いかと第一回移民の何にも分らない、先輩移民のいない時からムダンサ（移動・移転）が始まったのであって、ブラジル移民を語る時、その苦勞の程が、その人達のムダンサの回数で知る事が出来ると思えるのは、在伯七、八年、十年という人で、その年数よりムダンサの回数の方が多という人に何回も出合つて驚いたからであった。

然し、移転するとしても先輩移民がいないのだから不安なものであったろうと思うが、食べていけなければ移転してみるより仕方がないのである。

その様にして、なんとか生活の成りたつ所、出来れば幾らか儲けの残せる処はないものかと次から次へと移転の数

が増えていくのであった。

一九六〇年頃か、私がマリリヤ方面の某日系植民地に渡伯七、八年の家族が苦勞していると聞いて私の耕地で働いてもらうべく尋ねて行った事があった。

住宅は板造りの普通のコロニヤ(労働者用の家)程度であつたが、本人と話をしている驚いた事は、三人のかわいらしい娘はまだ小学生で手伝いにならず、畠仕事は夫婦の仕事で野菜作りの様であつたが、受取る野菜の歩合が殆んど金にならず、毎日マンジオーカ(いも)にフェジョン(塩たきの豆)をかけて食べて、ご飯はお正月とお盆位ということであつた。今時そんな生活をしている人がまだいたかと、気の毒になりパラナに移る事をすすめようとする、幸いに既に中央線はモジ市方面からアルファーセの歩合に誘う人がいて、そちらに行く準備中との事であつた。私は雇えなかつたが、モジ方面に行くならまだ良かったと思つた。戦後移民も安住の地に落ち着く迄には相当のムダンサをさせられていた人がいるのである。

私などは少ない方であるが、建てた掘立小屋がひっくり返るとか場所が不便とかで新しく建て替えたりして、数えてみると十一回目にロンドリーナの住宅に落ち着いて今の家は十二回目である。

又、妻の里を見ても一九三二年直接バストスへ移住してきたのであるが、初めの土地がやせ地なので翌年移転、二、三年して地味が判る様になつて、アレンダ(歩合作)

としてサンルイス地区へ移転、ところが此処の地主の地権問題で一年で追い出されてバストス内に戻ったが、前のロッテ（土地）ではなかった。然しそこも思う様でなく、他のセツソン（組）に移転、これで最初のロッテから五回目である。

しかし妹は二人結婚して家を出て、弟は日本に帰り、両親は老齡化してきたので戸主の兄夫婦はこれでは農業は無理と、妻をサンパウロに出してパーマを修業させて半年後にバストスに開店。一、二年して町が小さいとアダマンチーナに移転、繁昌して落ち着いていたが、サンパウロで教えてくれた人の店を譲り受ける事になって出聖、そこで八回の移転である。

運良く四、五回で済んだ人もある筈であるが、移民は案外にムダンサをしているのに驚かされるのである。

此の初期移民のムダンサは歴史として記録されるべきことの一つであるかと思う。

何処かの組織で住所の移動を調べていたが、住宅の移転も加えて統計を取って見ると初期移民の苦勞と希望に向つての努力の一端が更に詳しく浮び上つて来ると思うのである。

此の文を書いている処へ二人の婦人が訪ねて来られたので、用件の済んだ後に、ムダンサの事を尋ねてみると、八十六才の婆ちゃんは十回迄思い出してくれ、五十五才の末亡人は確実に十一回の移転で落ち着いたとの事であった。

此の若い婦人は戦後移住者であった。

ムダンサと移民、青い鳥を追い求めて歩いた移民のムダンサは移民史に忘れてはならない事項であると思うのである。

このような事から「移民の子移転つづきで古巢なし」の様な川柳が読まれたのであろう。

第二話 ムダンサと移民（2）



ブラジルで成功した一部の人の話をなお誇大に説明する

移民斡旋業者の口を、その俥信用したわけでもなからうが、自分にも運が良ければとの期待と、多分に地球上一番遠い外国とはどんな処であろうかと不安を抱えて、早くとも四十日、アフリカ廻りになると二ヶ月前後をかけてやつと着いた配耕地が、『予想より良かった』と、喜べた人は殆んど少なかった様である。

かさど丸の第一回移民でさえ、どこにも先輩移民がいないのに、その大方が配耕地に落ちつけなかった様であるが、実際問題として喰えないのでは仕方がない。何も儲からないのではかなわない。何んとかもう少し良い処がありそうなものと、ブラジル移民はその始まりからムダンサ（引越し）が付きものであった。

それに動きの取れない、日本や満州の様にきびしい冬期というものがなかったので、思い立てばいつでも移動が出来た事も手伝った事であろう。

私が渡伯して間もない頃であったが、在伯年数より引越した数の方が多い、此処に来たのが十何回目だ、と言われる人に行きあつて驚いた事を前の項で書いたが、その後も移転十回前後の人には相当に行きあつているので、ブラジル移民を語る時には、引越問題はずす事は出来ないと思うのである。

N氏も亦その一人でこつちに一年、あつちに二年と転々と移動を繰返していた。その為に安物のバネ付き組立て寝台の他には家具らしい物は何もなくカローサ（馬車）一台

に簡単にガサガサと積んで幼い子供を乗せて歩ける者は男も女もとぼとぼと、ふちのほころびた麦藁帽子をかぶって、歩いての移転であった。

そんな事を繰返していた或る年、臨月の妻を連れての移転の途中でお産が始まった。カローサの上では、どうしようもない。恰度通りかかったビーラ（小さな町）にペンソン（木賃宿）の看板を見付け飛び込んで一部屋借りて寝台にねかせるのであるが、宿の主人が日本人でおかみさんが、俄か産婆となつて親切に見てくれて無事お産が出来たのである。

然しそれで目出たし目出たしと喜んでいられないのはN氏である。二、三日の宿銭を持っていないのであった。それで後日必らず払いに来ると無理に承知して頂いて引越して来た事があるという。

かような貧しい中での移転をしなければならぬ主人の気持ち、ついて行く臨月の妻の気持察して余りあるものであるが、こうした事は何もN氏だけの経験ではないのである。このN氏の場合、何年かして、ようやく宿銭を清算に行くと、あの時のペンソンは他人に譲られていて支払いが出来ず、その後も気を付けていたが終に本人に逢う機会が無かった。

従つて俺の運命の拓けなかつたのも、あの借金の踏倒しが原因であつたかも知れないと強く気にしていたので、そう思うなら、白分の周囲に当時の自分の様な貧しい人を見た時、間接の借金払いと思つて面倒を見てあげてはどうか

と話し合った事であった。

又、ジャタイジンニヨ近郊で大成功している星野氏一家は、一九三五・六年頃セツテ・バーラス植民地から今尚ジャングルのパラナピアカーバ山脈構断百km余を親子孫十余人の徒歩でのムダンサを断行した人達である。道と言っても車の通る道ではなく、川には橋もかけてなく、かなりの川を渡る時は、恐ろしかったとは、私の父達の視察に出た時の話である。

パラナピアカーバの山脈は未だに官有林として広く保存されているので尋ねて見ればわかる事であるが、あの広い原始林の中を、自炊をしながら、老夫婦を抱え幼い弟妹を引連れ自分の子供は赤ん坊迄を背におんぶして、懐には正規の道を進む旅銭もなく、唯将来の為にもう少し希望の持てる処はないかと、夜は猛獣の鳴き声に対抗するに、唯枯れ木を集めて火をたく位の事で全く想像もつかないムダンサの苦勞をした人。

又サンパウロで、クリチーバの評判を聞いて昔の登り下りの激しい道をトランク一つかついで歩いて移って行った青年がいるという。四百kmを越す道のりである。

私の入植したロンドリーナの中央区でも、平田、今川、楨枝、小野、板倉、頼則氏らは、道の無いまま、近い人で三kmから六km位のジャングルの中のピッカーダ(測量師のあけた土地の堺)を全ての荷物を背にせおって何回も通つてムダンサ(引越し)が出来たのであるが、先輩移民許ム

ダンスとはその回数ばかりでなく、全く想像もつかない苦
勞をしているのである。

ムダンスと移民、この問題は誰か、又は何かの組織で、
もう少し詳しく調査しておく価値のある問題ではないか
と、思われて仕方がない。

第三話

ムダンスと移民 (3)

此の頃縁戚のお爺さんが亡くなって埋葬に参列して、フ
ト思った事は、此の人は早くからパラナに来ていたにもか
かわらず、案外にムダンスをしている事であった。

ちやうど移民のムダンスに付いて昔話を書いていたので
気になり、私の知ってからの此の人の歩みを思い出して見
る事にした。

此の人のパラナの初めはローランジャ郡内から始まり、
一九四五年頃か、マリंगाから四・五十km程奥に、構成家
族から独立して移り、そこで立派なカフェーを育てたここ
ろ、大変に良い買手があったのでそれを売ってしまった。

その人を仮りにT氏としておこう。T氏の考えは、独立
させて貰ったが、親戚の者と遠く離れて暮す淋しさが有つ
たので、この値で売れるなら、親戚のいるローランジャ管

内に戻れると考えるの事であつたらしい。

そこで一応ローランジヤの町に近い処にカフェーの育ててある土地を買つたのであつたが、何故か此処に落ち着けず、再び隣り町のアラポンガスの郊外に移つた。自分の土地を売つて、別の土地を買つたのであつた。面積は倍になつた。

その頃から、長い間続いていたカフェーの景気も下向いてきた。

値段ばかりでなく、ブロッカが湧き出して実を喰い荒すし、葉にはビツシヨ・ミネーロというウジが大量に発生して消毒に追われる事になつたので此処にも長居出来ず、ここを売つて余り遠くないサバウジア町の近くにやはりカフェーの育っている土地を買つて移転して見たが、その頃からカフェーの木にはいやなサビ病がまんえんしてきた。狭い面積の土地ではその消毒にはとても経営は困難になつた。

勿論広い面積を持っていた人でもカフェーでは生産費が出ない事になり、さすがにカフェー王国を誇つていたパラナ州も、カフェーを掘りおこして大豆小麦の機械化農業に変つていくのであつた。

そこで小面積の地主であるT氏の場合には容易に利益のあがる産物がなく、家族の状態も子供の時代になつてきたので、息子さんの意見で町へ出て商売をしようという事になつて、パラナに來た時を数えると六回目のムダンサで町

に出てきた。

町に出て来ても、良い仕事が残っているわけでもなく、四・五回のムダンサをして、やっとまあまあの家を建てて落ち着いたと思つた処で一生の幕が下りたのであつた。

パラナに来られて十回余りのムダンサであつたので、パラナに来る迄に何回されたかと親戚の人に聞いてみると三ヶ所目で資金が出来てパラナに来た事が解つた。従つてT家の場合は十三、四回のムダンサである。

此のムダンサの数は平均よりは多いと思うものの、此の位の人も相当にいる様である。

ここでふと思ひ出した。昨日病氣のお見舞いに行つてきた近所のO氏の渡伯後も相当にムダンサをされている。

O氏の渡伯は昭和八年で、先ずサンパウロ州に来て翌年ロンドリーナに移り、昭和十六年に土地を売却して、ロンドリーナ市の郊外に移転、そこから四年目に少し離れた土地に一時的にも借地農に移り、暫くして、ロンドリーナ市内に移転、市内に出てから三転四転して現在であるから、現在の家で八回目か九回目、これでは多い方に入るか知らん。

若し四・五回のムダンサで終れた人、落ち着けた人が居れば、幸いで有つた事を喜ばなくてはなるまい。

ムダンサするといふ事は大変な事である。そこに居れば、一寸間に合う様なものでも捨てる事になったりして無駄になる事も多いし、また近くムダンサになるかと思つたと

落ち着いた気持で家財道具を貫う事も出来ないもので、どうしても貧しいかつこうの生活になってしまふものである。

誰も毎年の様にムダンサをしたいわけではないが、利益があがらなければやむを得なかつたのである。

移民は錦衣帰国の夢に燃えていたのであるから、地方地方の良い噂さを聞いては右往左往したわけである。

今でこそ落ち着いたけれども移住を永住の覚悟で来た人は至極僅かであつた様である。

第四話

移住翌年 我が家の移転

私はこの頃六〇余年前の移住した当時の事を思い出しながら、ボツボツと書きとめているのであるが、六〇年もたつと思ひ出せない事の多いのに、自分であきれる事がある。今この項で移民して始めてのムダンサの様子、即ち、セツテ・バーラス植民地から、ロンドリーナ迄の当時の旅行の様子を書きたいのであるが、殆んど忘れていゝのにあきれるわけである。

一九三三年（昭和八年）七月三十一日に、地が決定し、二、三日で掘立小屋を立てて、で始まつたのであつたが、

二ヶ月程した頃、いて急いで移転する事が決まるのであるが、セツテ・バーラスに到着し、三日か四日目には土ジャングルのデルバ・マツト（伐採）が希望一杯或る日突然此の植民地には将来性が無い事に気づくその事は別な項で書いたので、此こではここからの移転の様子だけにしたい。

切角希望に燃えてジャングルの開拓をしたのに唯の一作の米を収穫しての移転は誠に情けない残念な事であったが、次のパラナ州のロンドリーナに新しい希望を持って移転する事になり日本から知り合つて来た大西、加藤両家との三家族は収穫のおくれた者に手伝つてとれた粃は一俵五〇キロ入れて当時の金で七ミルレースで買つてもらつた。七ミルレースは米ドルで一ドル位であつた。ドル価でも当時のドルの方が大変に値打ちが有つたと思う。

資金は日本から持参した物は、土地代の入金と一ヶ年の生活費に殆んど消えていた筈であるが、収穫した粃九〇俵の代金と、農閑期に十八才の兄が道路工夫として働いた賃銀が有つた。

日当が粃一俵より二割位高かつたので助けになつたのであるが、それにしても僅かの資金で良くも九人家族の移転を覚悟したものである。「今出なければ動けなくなる。」と、同船者の若い大西、加藤氏に注意していた父の姿が思い浮かぶのである。

五月一杯で仕事を片付け六月初め、いよいよ第一回のムダンサ（引越）の出発である。

三家族でカローサ（馬車）を二台雇つてきて、荷物と歩

けない者としてリウマチの私の母と幼い子供たち三、四人乗せて歩ける者は少年少女まで歩いたのであるが、その距離が二十四キロあって、そこに松実商店と言ったと思うが一軒の店があつた。その松実さんのお世話で、その店の前からムダンサはカノア（丸木舟）に積み替える事になつていた。

二十四キロの途中で同船者の石川さんの土地の前を通ると、若い夫人が、良くうれたバナナの大きな房を一つ馬車に乗せてくれた。私たちの入植地はジャングルばかりであつたからバナナは無く、日本から来た当時であるからそれはそれはうれしかった。

幸いに天氣の良い日で、女・子供の足でボツボツと歩いて来たのであるが、日の暮れる前に舟着場の松実商店に到着した。早速荷物は、舟付場に建てられてある、倉庫におろされた。そこには人の待合室らしい場所も広く作つてあつて二十人余りの者が坐つて休まれたし、尚片方に一部屋有つた。

この舟着場に来るとキロンボ植民地の道べりで小さな店を出していた、新婚らしい山本勝造氏が、植民会社の植民係りに就職していて、其の日この松実商店で行きあつたのであつた。

彼が来ていた事情を知らないので親たちは、『色々と会社のお世話になつたが、此の度パラナへ移転する事になりましてー。』と、挨拶をしていたが……その内に松実さんの方から、あなた方のムダンサは会社におさえられ

て、今夜の便で積み出すことが出来なくなった。山本氏の来ているのは、その為であるという事が告げられて、思いもよらぬ事と、一同驚き乍らも山本氏と交渉になるのであるが、それが夕方明るい内から、夜半の十二時頃迄かかったのであった。

山本勝造氏もまだ若い三十才前後であつたし、半官半民の海外興業株式会社という立派な会社に就職したばかりの新社員であるから、ねばるだけねばつたわけである。然し此方にも理屈がある。

『ジヤングルに初年度の地代を払って入って土地の二割乃至三割を開拓して、粗末でも住宅も建てながら植民地に見込みが持てないから買手もなし只で置いて行かなければならないのに、会社は何を払わなければならぬのか』

と、いうのが此方の言い分であり、山本氏の言い分は、「何はともあれ一作収穫したのであるから、次年度のプレスタソン（年賦）と一ヶ年の利息を払ってくれ。」

と、突つ張つて引かないのである。

理論は我々に有るが午前一時前に此処を出ないと、次の乗り替えに間に合わない事を知っている山本氏は、無理でも突つ張つていれば、職務上の体面が立つのであるから立場が強い。

それは、彼の気性だけではなかつたのである。

此の植民地の脱出者と会社の取つた態度に付いてはもう少し詳しく項を改めて書く事にして、この項を進めたい。

延々数時間の交渉も空しく敗北して、なけ無しの金を取られて、カノア（丸木舟）に乗り込んだのは夜の一時であつた。月の良い晩で川面が良く見えていたし、兩岸の大木からぶら下っているシツポー（つるの類）を手でよけながら丸木舟は相当な時間をかけてリベイラの大河に出ようとしていた。その様子は、全くアフリカの猛獣境の探検そのものであつたが、親が一緒なので不安はなかつた。

丸木舟、即ち一本の木を削つて造つた舟であるが、大変太い木で造つてあるので米など数十俵積めるといふ事であつた。当時のトラック一台分は積めたわけである。

夜の明ける頃昨年入植する時に舟の乗り替えをした、ジュキヤ河との交流点に到着する。

昨夜は山本植民係との交渉で出発は遅れたが、乗り接ぎの蒸気船に間に合つたと喜んだのである。

第五話 続・移住翌年の移転

リベイラ河とジュキヤ河との分岐点が、イグアツペから上つて来る蒸気船の乗替場になつていた様であるが、売店もなければ屋根の有る建て物は一つもなく全く殺風景な処であつた。立ち木が二・三本有つたが、荒してあるわけではなく。パスト（牧場）になつていた。二回立ち寄つたのであるが、共に早朝であつたので牛は居らず、鶏が鬨の声を

あげていた。

昨年寄った時、ブラジルの鶏が日本語で鳴いたと楽しい
思いをさせてもらったのも此処であった。

間もなくジュキヤ行きの蒸気船が来て乗り込んだのであ
る。朝霧の晴れやらぬ早朝であった。

此の舟、蒸気で走るのであるが、スクリユーは無く船尾
の水車が廻って船を押し進めるので珍しかった。大きな水
車の下部三〇センチ程が水の中につかって船を漕ぐので
あって、うまく出来ているのであるが河を上るので、速力
は余り出るものではなかったが、道の無い時代であるから
充分に間に合っていたのであろう。

船でジュキヤに着きここから汽車でサントスに来たので
あるが、ジュキヤに泊まったのか、又、サントスにも泊
まったのか、このあたりの事すっかり忘れてしまった。

サントスからの汽車で山脈を登った時の汽車が、下る汽
車とカーボ・デ・アツソ（ワイヤー）で繋がっていて、下
る汽車の目方を利用して登っていた様に記憶しているの
であるが、これも何かの本でも見た物とこんがらかったの
間違った思い込みであるかも知れないのである。

とにかく大変に急坂を登ったと思っている。

やっとの思いで汽車はサンパウロに着いたのだ。ここで
は駅に当時の日本の様に赤帽ならぬ白い帽子のカレガドー
ル（ポーター）が沢山いて、引越荷物の多い私たちの処に

集まってきた。

言葉が通じないものだから帽子に付いている大きな記章にナンバーが入っているのを指さして『ガランチード（确实）・ガランチード（确实）』と連発のカレガドルをよそに、一応は駅の片隅に荷をまとめて置いて、若い者と云っても、大西、加藤両氏に兄の三人位で安ホテル捜しに出て行き、ルス駅のすぐ前方にそれを見つけて、ホテル入りをした。

翌日親達はどこで聞いてきたのか、オウリニヨウス迄の無料乗車券を市役所か、移民の世話をするブラジルの役所から戴いて来た。

当時もサンパウロ市内に無職労働者が多くて困った市は、州内の農村地帯に移動する汽車賃を援助していたらしい。又、北パラナ土地会社のサンパウロ事務所からはオウリニヨウスからロンドリーナ迄の無料乗車券を頂いて来たので大助かりをしたのであった。オウリニヨウスからの切符は土地会社が土地購入者全員にサービスしたものである。

サンパウロでは、何か欲しい物があれば買って行かないと向うは田舎町で何もないといいながらも、日本から持参した小使いは殆んどなし、一ヶ年の収穫も百俵足らずの आरोース（籾）で、一俵一ドル程で売って来ているので金らしいものは持ち合わさず、収入があがる迄には八ヶ月位はかかるので、その間の生活を考えると何も買える筈はなく、父が一丁の虎ばさみを買った覚えよりないのである。

虎ばさみとは動物をつかまえる道具である。隣りの大西氏は夫人に古い手ミシンを一台買われた。百二十ミルレースであった。

初めて見るサンパウロの都会であったが、買物したり遊んだりして居れる立ち場でないので、無料乗車券を頂くと早速ホテルを引上げて、希望のロンドリーナに向う汽車に乗り込んだのである。

早朝サンパウロを出て夕方オウリニョウスに到着したであろうかと思うが記憶は全く薄いのである。ただ途中ソロカーバ駅を過ぎてしばらくした処で、視察の時百キロ程歩いて出たイタペチニング駅から此の辺に出てきてこの汽車に乗り替えてパラナに行ったのだと父の話であった。とに角言葉が通じないので『パラナ州のロンドリーナに行きたいのです』と書いてもらった紙を見せながらの旅で不自由したという事であった。我々はその不自由を経験した親と一緒に良い土地に行くという安心したたのしい旅行であった。

相当な時間をかけてオウリニョウスに到着。ここに到着の三時間位前からは相当なコーヒー園の中を通った筈であるが、その記憶のないのは或は夜中であつたのかも知れない。

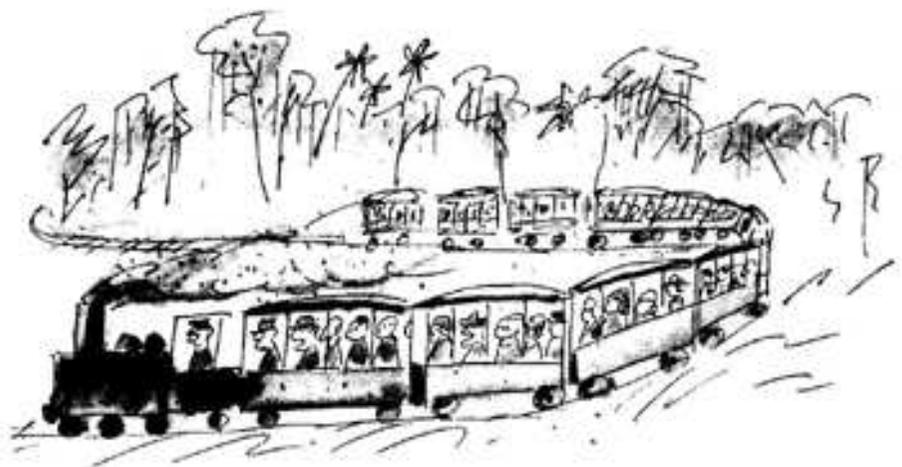
翌日、日の出前、東の空が白々と明けて来た頃ロンドリーナに向けた、パラナ鉄道の汽車に乗り込んだ。夜通し走ってきて汽車を乗り替えたのである。汽車が発車して

間もなく両側にコーヒー園が現われた。父が「これがコーヒーの木で、此の木を植えて置くと、四年目から実が成り出して何十年も成ってくれるので生活が安定するのだ」と希望一杯の話をしてくれるのであった。

オウリニョースを出て一時間程すると、自分の汽車の後部が、反対側に走って行くのが見えた。すごい曲りの激しさに驚いた場所が有った。客の中で長さで請負ってメートル稼ぎをしたからこんな事になったと言う人が居たが、バンデランテス近くのあの盆地を機械のない当時人と馬の仕事で埋めるとしたら容易に出来る仕事ではない。

途中特に変わった事もなく夕方ジャタイ駅に到着、此処が当時の終点であった。

此処でバスに乗り込んで少し出たと思うとチバジの河でバスから降りて人は人、バスは空のバスでバルサ(渡し舟)に乗って生れて始めて渡し舟の経験をしたのであった。大変に大きな河だと思った。チバジからロ



ンドリーナの間は二、三ヶ所拓いた土地が有ったかと思うが、殆んど原始林であった。イビポランには一軒の家も無かったのである。

これから入植する土地も此の様なジャングルなのだと思いなながらも昨年の経験で、大変な事になるといふ様な不安は少しもなかった。むしろ明るい希望に燃えていたのであった。

ロンドリーナ到着は日が暮れていた。終点はプラッサ・ウイリエ・ダビーデスのルア、ミーナス・ジエラエス側で二百九十七番、現在バンコ・バナスパの敷地であった。今のバナスパのガラージの入口の所が昔もバスの入口になっていた中に入って客をおろしていたものである。

ルアに面しては木造の事務所の様な物が建っていてその裏側で乗り降りしていた。此処がオニブスのテルミナルの最初であったかも知れない。車も小さかったし便数も少ない時代であったから十分に間に合っていたのであろう。

早速半年前に親たちが視察の時に泊まった、池田旅館に行くに幸いに部屋が空いていて三家族全員泊まる事が出来た。

場所はルア・セルジツペの今のバンコ・ノロエステの下の角であった。

翌朝からジャングルの開拓に取り掛かった。拓かなければ一坪の畠もないからではあるが、ホテルに投宿して二日

程、先に契約してあった土地がカフエーに不向きである事が判明したのでまごついたが、幸いに大変良い土地がファゼンダ・コアチ（コアチー耕地）の隣接地に見つかって変更できたので、早速それぞれファゼンダ・コアチーの契約農をしていた先輩移民の物置小屋を借りて、一旦移って開拓にかかるのであったが、私の家では、天野氏の物置小屋を借りて引越し、そこから通って自分の土地が良いので希望に満ちた張り合いの良いスタートであった。

第六話

低くかった労働賃金

昭和初期の移民の話になると、苦勞した話が多いが、私の家ではその点父が心配性で一人前の体力の無い息子たちを連れてコーヒー園の労働者としてはとても体がもつまいと植民会社の土地を買う契約をして来たので、都会の生活から、ジャングル開拓の為に掘っ立て小屋にカンテラの生活とはなったが、それは覚悟の事で、希望に燃えて仕事が出来たのは幸いであった。

そうでなければ私の様な体力の弱かった者は途中で挫折していたであろう。

然しまた初めから小面積でも独立経営であったので、給

料生活者の気持ちが理解出来ないで、後年、現在でも、何かの団体に所属しても、そこに働く、勤めて下さる人々の気持ちの理解が悪く迷惑をかけている様である。経験をしてない事を理解する事はむずかしいものである。

一般の人の様にコーヒー園の労働者として来て、働いても働いても貧しい食料代が払えないというような様な苦労はせずに済んだが此のパラナでも相当に苦労をした人は居た様である。

一九五〇年代のコーヒー景気に乗って私達も仕事を少し拡張していた時代の事、新しく拓き出した奥地の近所の耕地に働いている人に、日本からの手紙が届いているので届けて欲しいと頼まれて持つて行った時の事であった。ジャングルを伐採して焼いた後の枝片付けを真っ黒になってされていた。広い焼いた計りの畠に何故か一人でカーン、カーンと枝を切つて居られたので、道路にヂーピ（ジープ）を止めて働いて居る処迄入つて行つて手紙を届けると、

「親から手紙をもらつても仲々返事の本一本も出せない始末で・・・。」

と、言われるので、町迄出るのが大変なのかと思つて、「今、簡単にでも書かれれば、明日にでも投函してあげますよ。」

と、というと、

「最低給料で働いているので、命つなぎの食料代がやっと

で、とても切手代などに使っておれないのですよ。」

と、言う返事であった。

渡伯当時、フアゼンダ（耕地）生活の貧乏時代では日本への手紙の切手代にも不自由したものであったという話は聞いたものであったが、その不自由な生活をしている人に行き合ったのは始めてであった。

私はその姿を見、話を聞いて、何故もう少し有利な仕事に代わらないのか、かわいそうにと思ったが、その人の主人は知り合いの人であったし、私も亦、労働者としては最低給料の人を相当に使っていたので言えず別れたのであった。

ブラジルでは農村の仕事に使われるのは大変であったが、今でも百二、三十レールの最低給料で働く労働者が農村の場合使おうと思えば相当にいる事と思う。農村では住宅、水、電気代は殆ど主人持ちになるから暮らせるのかも知れないが、唯、農村労働法がうるさくなり、裁判問題が多くなつて、実質的に農村では労働者が使えなくなつたということが実状で、以前は農村に雇われていた労働者が多く、従つて農村地帯に沢山のバスが通っていたものであるが、現在では遠距離を走るバスが通過するものは有るが、農村地帯で営業していたものは殆ど姿を消してしまつた。私の農場でも数十軒の労働者の住宅を取りこわしてしまつた。従つて畠は労働者を最低に減らして機械化したのである。

然しこうした労働者の使いにくくなる以前は白分が独立

さえすれば、安く働いてくれる労働者がいたので助けられたのであった。

私たちのような、ろくに言葉の解らない外国人の処に幾らでも来て働いてくれるので幸いであった。

ところが一般の耕地では、その安い賃金で人を使いながら、更に耕地内に売店を開いて、その安い賃金の頭をはねるのが普通であった。

私はそうした事を見ながら、一九五〇年にフアゼンダと名の付いた耕地を持つ事になったので、耕地内に売店をあけてみた。然しそれは労賃の頭をはねる事を考えたのではなく、労働者に便宜を与える為であったから、町の値段で提供すれば、低い給料でも少しは助かるであろうと考えての事であった。

従って店を開けるのも夕方労働者が仕事から引き上げてくる頃から二、三時間、私たちきようだいで店番をしたのであった。

安いから労働者は喜んだ。私たちも賃金との差引であるから現金販売と同じで少しは儲かったのであるが、此の店長くは続かなかつた。理由は労働者側から思わぬ不満が出て来たからである。

どのような不満が出たかというのと、私たちの売店は大変安くて助かるのではあるが、仕事の帰りにその前を通るので、ついむだ使いをして月末になると貰う勘定が少なくなつて困るといのである。事実勘定日になると、殆ど支

払分の無い程使っているのであった。

元々・労働者の為を思つて開いた店であつたので、そうゆう事ならと一年足らずで閉店して、元の様には勘定日にトラックで町へ買物に連れて出る事にしたのであつた。

又、当国の経済がインフレになつて来た当初、銀行にポウパンサ預金が無く、歩合作者が一寸まとまつた金が出来ても預金をすれば目減りがするので困っている時、一人の歩合作者が、田舎の某売店の主人がX%の利子で資金を集めているが貸しても良いものかと相談に来た。銀行の定期の利子ではインフレの半分にもならないので当然な話であつた。相談されると無責任な返事もできないので、一、三日考えさせて貰う事にした。それは私の若い時、銀行との取引が無いまま、常に買物をしていた立派な商店に農産物の売上金を預かつてもらつていたところが、御主人が無くなる間も無く商売が左前になつて来て相当の金額が貰えない事になつた経験があるので若しその様な事になつたら、安い農村の仕事で折角儲けた僅かの金で有るから気の毒と思ひ私のところで、預かる事にして利息は銀行の短期貸出しの利息より更に少し上のせして払い、若し預金者に必要が出来れば、一ヶ月以内の余裕で支払う条件にすると喜んで私に預けて行き、暫くすると、私も、私もと数人から預かる事になり、相当な額になつたので農地に投資して置いたので損する様な事はなく、却つて儲けさせてもらつた。

後日銀行にインフレを付けるポウパンサ預金が始まって来たので、私は直ちに返済して個人個人の名義の預金に切り換えて安心したのであった。

振り返ってみると、誠に激しいインフレであったが、預金に大変な利子がつくので錯覚ではあるが、懐かしい思い出もある。

小さな会、例えば地方の県人会等、僅かの資金の利息で何年も運営が出来ていた様な気がしていた。

その頃、中央線の某有名人が、近所の人々の金を預かっていてという事は、その人の大事業が好成績を挙げて信用されていたので、近隣の人々が預かって欲しいと言って持って来たとの事であったが、その内に思わぬ経営不振に落ち込んで破産する事になり、随分と世間に迷惑をかけたという話であった。私も調子に乗って続けていたら、痛い目に合っていたかも知れない。

世の中の事、相手の為と思っただけでも良い結果にならないければ、良い事をした事にならないであろうし、難しいものだ。

第七話

お菓子

私たちは着伯して十日目頃には早くも現地に入植して、未だかつて人跡未踏の原始林の伐採に取りかかった。

八月に入っていたので、急いで拓かなければ、蒔付時期を逸すると教えられて急いだのである。一九三三年の事であった。

同船者が五家族並んで入植したので、あの広大なジャングルの中に十余アルケール（アルケールは二町五反弱）の畠が忽然として出現したのであった。

その仕事の為にマツシャード（マサカリ）フオイセ（下草刈り用の大鎌）等の道具や、食料として、白米、砂糖、塩、麦粉その他の物資をセツテ・バーラスの店で買い込んで入植した。

その折更に二ヶ月目位に届けて欲しい物を共同で注文してあったので、その荷物が届いた時、更に次の便の注文をして置いて届けて頂くといい事を二度、四度繰返してもらった様であったが、その度に忘れられていたものに、子供へのお菓子がある。

十ヶ月居たセツテ・バーラスでそんなことはなかるうと思ふのであるが、バーラ（あめ玉）をなめた覚えがない。

或る日母親が、「お菓子の代わりだ」と言つてマン

ジョーカ（いも）の粉を炒りなおして、それに砂糖を混ぜてくれた事があった。

時既に自分の土地に移っていたから着伯三ヶ月にはなっていた筈である。母にすればお菓子には不自由のなかつたお菓子屋の子供をつれて来ているのであるから、特に気にかかっていたのかも知れない。私の家では札幌市で二十二、三年お菓子屋をしていたのである。

さて前のマンジョーカの粉に戻るが、此の粉はフエジョン（豆）を煮てご飯にかけて食べる時に、いつしよにかけて食べるもので既に炒ってはあるが、炒りなおすと新鮮な味になるし、特に砂糖を加えてお菓子としていただく時には、その方がおいしいと思った。

日本では白米や、モチ米を炒って粉にした物と思うが、『こうせん粉』と、言ってお菓子の原料に使う粉が有ったが、それに似ていておいしいと言って食べたものである。弟妹たちは紙に包んでおいて、時々出してはなめて喜んでいたのであった。

又、或る時、近所に住んでいた現地人の所からミーリヨ（トウキビ）の種を分けてもらった時、何本か余分にもらって来て、あの堅い粒をそのまま何時間もとというより、一昼夜も煮たと思うのであるが、その位煮ると何とか食べられる様になって、食べたのであるが、何も無い時代では何か変わったものが食べたいものであるし、母も何かを食べさせたいと思ったのであろう。このミーリヨも臼でつい

て皮をむけば早く煮えて食べ易いのであるが、渡伯当時はかわをむく事を知らなかったので仕方がない。

翌年パラナに移つて来たので町まで四キロという便利な所に暮らす事になって、時にはお菓子も食べられる機会に恵まれたのであるけれども、町に出る度を買ってくるという程の気持の余裕はなかったようである。

入植した翌年（三五年）珍しい事にコアツチー耕地で土地会社が試験的に植えた物の様であったが、小麦が美しく実ったので父が少し分けて来て水あめを造ってくれた事があつた。

小麦でもやしを作つて、それを乾燥して粉にして置いて、原料のマンジョーカが煮えた処え水を捨てずに、先に作つてあつたモヤシの粉をふりかけると、何程もなくマンジョーカは解けて鍋の中は唯の水の様になつてしまつた。

鍋を見つめて不思議に思つていた私に

「モヤシは大麦を使うものだと言っていたので、小麦ではどうかと心配していたが良く利いたものだ、何でもやってみれば良いのだな。」

と、言つた母の言葉が思い出される。

さて、マンジョーカのとけたのを見てから私は畠に出た。後は弟妹たちが火の番をしていたのであろうが、夕方かえつてくると、珍しい水あめが出来ていたのでうれしかった。半分には妙つたゴマが混ぜてあつた。それを箸の先に丸めてなめて楽しんだのであつた。

こんな事を思い出ししてみると、何にも無かった開拓時代も亦懐かしいものだ

それから間もなく町のお菓子店の値段が、原料の値段に比して案外に高い事に気が付いたのであった。それは父にはそれが日本に於ける自分の仕事であったからの事であろう。

“商売道によって賢し”と、いう事か。

日本を出る時は、二度とお菓子屋はしないと相当に決心していた様子であったが、町の菓子の値段では、どんな幼稚な方法でも農村の労働者の賃金の三、四倍にはなる事がわかると、早速日本に残してきた娘（私達の姉）にせんべい焼きの道具を注文すると、半年ほどで届き、焼いて町に持って行くと全製品を一手に引受けて下さる人がいて大いに助かり将来に備えて町に宅地を二戸分契約したが、更に残って来た金でカフェー向きの土地を二十アルケール父が視察して買ったのであった。お菓子の製造はどこ迄も副業としての考えであったのかも知れない。二十アルケールの土地を買って喜んでいた父は、それから間もなく病に倒れて、あっけなくも二ヶ月ほどで他界してしまった。

父が亡くなると、母は菓子造りは入植当座を助けてもらったので、これで良いのだ、沼田家の者は商人向きでないから、町の宅地は売って農業一本にしたが良い。ブラジルの農業は労働者が使えるので有利だ。楽しい等と考えられた時代の話は、今は昔の物語である。

第八話 歩いて野球遠征



一九三七年頃ではなかったかと思う。兄達が「今度のドミンゴ（日曜）にはカフェザール植民地へ野球の遠征に行く事になった」と喜んでいるので、「私もついて行くよ」と、頼んでおいた。

カローサ（馬車）を頼んであるとの事であったが、前日になると、カローサの都合が悪くなったので、歩いて行って、帰りをカンベ町からカローサを頼む事にしようと言う

ことになった。今はカンベと言っているが当時はノーバ・ダンシンと言っていた。独逸のダンチヒ市の名を取ったらしい。

さて、当日になって歩いて行くという事で暗い内に起きてべんとうを作ってもらって、一応学校に集合する。距離は二十kmは無いだろうが相当の道程であるから、歩いて行って試合をするという事は仲々大変な話であるが娯楽の少ない当時の事が思い出される。

私はスポーツはスコア係で出場しないのだが、当日のメンバーははっきりした記憶がない。

私の兄がファスト、隣の石川泉君がキャッチャー、投手は吉村正雄君であった。その他頼則兄弟、曾我部の博君もいたか、と思うが少し若かったかも知れない。

その他誰がいたのか記憶に無いが、いずれにしても完全にチームは出来ていたのであった。

一同集合して未明に弁当と道具を持って楽しく出発した。頼則兄弟に石川泉君がいるので楽しく賑やかな遠足となった。

何時頃に到着したのか覚えがないが、試合は、負けて一寸シユンとしていたが、終盤になって、思いがけないチャンスが来て、急に元気づいて、少し過激な野次も飛び出す場面もあったが、結局は青木、那須、大沼三兄弟等の活躍で押し切られてしまった。試合が終れば、もう、勝負はどうでも良かった。

汗を流した後は楽しく歓談して、カフェーを御馳走に

なつて帰途についたが、此の時の青木善哉君のあの声、大沼兄弟のあの態度等懐かしくて忘れられるものではない。

さて、大変御馳走のあるカフェーを頂いて、帰途についたのであるが、さよならさよならと手を振って別れても帰る方が、野球の道具を担いで歩いての出発であるから、送る方も一寸つらい見送りであつたらうと思う。

さてカンベ町迄たどり着いて猶原氏のBARにて一休みとなり、グワラナを飲んだ覚えは明らかだ。前に腰かけた頼則栄君は、「グワラナーは何うも甘すぎていかん」と言つて、セルベージヤ（ビール）を飲んだ。この時誰かもう一人頼則君の相手をしてビールを飲んだ人がいた。

今思うと石川君の兄さんのヒゲをはやした一名ヒゲさんで通っていた石川清さんではなかつたかと思う。野球はしなかつたが、見物応援の好きな愉快な人であつた。

さて一休みして、此処からカローサを頼む予定でいたものが、カローサー口達が日曜で遊びに出ていて不在らしく、それなら序に家迄歩けと言う事になつてとうとう往復歩いてしまった。

疲れたというより懐かしい思い出であるが今では当時の人々が亡くなられたり、移転されたりして、話し合うこともできない。なんとも淋しい次第である。

此の時の試合に参加した人の中で私を除いて四人は確か健在の筈である。カフェザール植民地の大沼三兄弟に此方側では頼則勇氏一人の様だ。頼則氏は今年（九七年）八

十六才との事である。

野球を楽しむとはいえ往復四〇キロを歩いた事など、今の青年に話しても、馬鹿ではなからうかと思われのが落ちであろうが、この健在の方々に此の一文をお届けしたら感慨無量のものがあるかと思う。或は涙を流されるかも知れない。

発刊迄の健在を祈っております。

注 その後聞くとところに依ると、大沼兄弟にも一人は亡くなられたそうである。ご冥福を祈る。

第九話

チバジの石橋が落ちる

それは一九四三・四年の頃であった。雨の多い年で、作物は良く出来ていた。米などは水田の様な出来振りであった。我が家では幸いに草に追われる事もない年であった。毎日の雨であったが、作は良いし心配事は無かった。ところが誰かが見てきたのか、チバジが増水して鉄筋コンクリートの橋が通れない上、どうかすると崩されてしまうかも知れない、という噂が伝わって来た。

とにかく二ヶ月近く毎日降らない日は無いのであるから、増水も甚だしいものである。事は想像できる。

そこで、仕事は出来ないし、噂を聞いていても仕方がない、「行ってみてこようか」と、兄弟三人話がまとまって、隣りの馬も借りて、チバジの増水見物に出かけたのであった。

フレーザ地区の私の家から十五、六キロの道はまだ舗装されてない土道であった。

時々の夕立も外套を着ていたので何事も無く、一時間半程でイビポランに着いたが、毎日の雨で市内もすべる泥道の上シブシブと時々小雨が来るので誰一人として歩いていく者はいない状態である。セントロ（中心街）のバールの前に馬を止めて、カフェ一杯飲んだが、店には一人の客もいない上、町全体が全く淋しい状態であった。

今思うにこの人一人出していない霖雨の日に三人の外套を着た者が乗馬でトボトボと歩いている姿を窓越しにでも見た人はどんな風に想像した事であろうか。お産で或は急病人が出て、お医者でも頼みに来たのであろう、と気の毒に思ってくれた人はいても、まさかチバジへ、増水の様子を見物に来たとは気の付く人は居なかったであろう。

その後一時間半余りで橋へ到着した。雨の中の泥道であるから車も人にも会わず危険は無い様なものの、道は良くすべる。

それに石の橋から手前何十米か、盛り土をしてある部分が、ところどころ崩れてカミニヨン等はとても通れる状態ではなかった。われわれは馬であるから何の事も無くコン

クリートの部分迄行けたが、コンクリートと盛土の接ぎ目の所では両側とも崩れていて、盛土の部分は、コンクリートの部分より大分狭くなっていた。その土の崩れは、上からの雨の為ではなく、増水によつて盛土の裾の部分が流されて下から崩れているのであった。

此の狭い危険な部分をペデボードの様な小さな車で通行したばかりの跡があつた、全く危い事である。

私たち三人は橋の上で、ゆっくりと増水の状態を眺めた。汽車の通る橋は此方の橋より相当に低く、もう二mも増水すれば水に埋まるかと思われたが、やはりコンクリートの立派な橋であるから、流される事はなからうと思つた。何事も”百聞は一見に如かず“だ。

その後も時々増水して、橋から見ると川下の左手の川べりにある家が水に埋まって瓦だけ見える事があるが、昔、私たちが見に行った時の方が、もう少し増水していた様な気がする。とにかく六十日の間一日として雨の気の無い日が無かつたのである。

世界では、豪雨のため数時間の雨でがけ崩れが起こったり、家が流されたり人命が失われたりする雨の被害が相当に多いものである。

しかし、ここは地形が波状形の為に河の氾濫で、住宅が流されるという様な被害が殆んどないのは有難い処だと思ふ。

ここ迄の文は一九九五年に書いてあつたものであるが、

今年一九九七年二月の大雨では五十余年前より雨量は少ないのであるが上流も広くその殆んどが開拓された為に急激に増水してきてジャタイの橋の辺では二米程昔より増水して汽車の通る方の橋ゲタ迄届いたという事である。

近くに住む人は恐ろしい思いをされた事であろうと思ふ。

世の中の事すべて過去の最悪を標準にしても周囲の事情が変わっていくので記録は更新されるものであるから、深い注意が必要の様である。

第十話

見当ちがい

初期の入植者が、五、十アルケールの開拓をしていた時代に、コンプラドールとして進出して来た柞磨氏が、フロレストポリスに既成コーヒー園を何百アルケールか購入されたのは日系人としては始めてのファゼンデロ（大地主）の出現という事であったかも知れない。

事業家として成功された氏ではあったが此のファゼンダでは初年度に相当に苦勞された様である。

現地差配は、クニヤード（義弟）の今川加寿太氏に頼んで、次男の澤一君を借りて行ったので安心であったが、苦勞した問題は、広いカフェザールに、一体何千俵の力

フェーが実っているかという目見当の大間違いで予想の三分の一程の実収穫であったそうであるから大変である。

私も後には二、三度フォルマード（既成コーヒー園）を買ったが、やはり、その時は初年度の収穫の見当違いをすると後金の支払に当てにしているので大変なわけである。私の時には心配であったので親戚の経験者に見てもらった。不揃いのコーヒー園で見当の付けにくいものであったが、私の見当を話すと、その人は、その見当でいるなら心配はいらない。更に二十%以上の増収となろうと言ったが、三十%も増収になったので大助かりをしたのであった。

私が低く見たというのは売り手の支配人に尋ねると、私の見当より三十%位少なく言うので心配したのである。売り手が少なく見ていた為に、此方は安く買う事が出来たのかも知れない。

話は元に戻るが、柞磨氏の場合予想の三分の一に減ったのであるから大変である。甥の澤一君が現地にいたのだから、盗難ではない。然し納得のいかない問題であったのである。

という事は買う時に各タイオン（区劃）毎に斜めに一本々々何程実っているかと調べた結果が、私の記憶では六〇〇〇俵を上廻るとの事であったらしいものが、僅か二〇〇〇俵程の収穫で終わったのであるから、大変な予算狂いであった。

伯父さんの機嫌は悪いが澤一君にすれば、無い物は無いので、コリエツタ（収穫）賃も少なくて済んでいるのだからしかたが無い。罪は斜めに調べて歩いた人の見当違いであるが、此の人が誰で、柞磨氏とどの様な関係の人であったのかは私の知らない事である。

唯私が偶然氏の事務所へ伺った時に、そうした話し合いをしていて知り合いの私も聞いてくれと言われて聞いただけの事であった。

その頃、私の家では千俵を収穫する様になりたい希望に燃えて二、三百俵の収穫をしていた時であるから、六千俵もとる予定であったとは大きな人もいるものだと思った事であった。又、その六千俵が二千俵になったのであるから、頭にくるのは当然であるとも思った。

お互いに人生を送る上で余り大きな見当違いは大変であるから、注意が肝要であるが、これも車の事故みたいなもので注意していても、さけられない事もある様だ。

それにしても斜めに一本一本実り工合を調べさせたという柞磨氏の緻密な調査の仕方には私も感心させられたのであった。唯此の度の失敗は派遣された人が主人の言い付けを守らず実測していなかったのが原因であつたらしい。

私の友人もアストルガの方面でファゼンダを購入して、同じ様に初年度の収穫予想の狂いで結局破産してしまつた事がある。見当違いは怖ろしいものである。なれた自分の畠では見当もつけ易いが、始めての畠では解りにくいもの

である。

尚又、総ての物がそうであろうと思うが、豊作の年には、予想よりも増収する事が多く、不作の年にほ少なく見積っているのに更に減収のしやすいもので、収穫後頭を悩ます事が時々あった。不作の年の予算狂いは苦勞するのでよくよく注意したい。

第十一話

コロニヤのコレクション

先日、中河原氏の末亡人が亡くなられて、その葬式に参列させて頂いたが、その節、珍しいものを色々と見せて頂いた。主に故中河原氏の作品や、蒐集品であった。

氏は大工職人であったが、移民七〇年祭の折り、記念館に彫刻を一個寄贈されていたので良い趣味のある人だと思つてはいた。後に娘さんの Y o s h i y a 先生が仲々芸術的な立派な絵を画かれるので一枚欲しいとも思つたが、壁と言う壁には何かが掛けてあり、どちらかと言えば掛けすぎで落ち着かない事になつてゐる。若しインテリア・デザイナーに見てもらえば、半分位ははずせと言われるだろうと思う。

妻には何時も、「旅行に出ても飾り物は買わない事にしましょう。棚の中に飾つてやれない捨てるに捨てられない

品物が沢山眠らせてありますからね」と注意されているのである。

以前に訪日した折り親戚の者が仲々立派な書を書いて表装をしてくれたので、住宅を新築した折りに、床の間を造つて貰ったが、此処も、掛軸一枚で満員である。

中河原氏の住宅も、大きい方ではないので、折角の製作品も、蒐集品も、陽の目を見られずに淋しい思いをしている風情であつた。或る物は置き場に不自由して雨ざらしでいたんでいる状態であつた。集める人は趣味で集めたとしても相当に犠牲を払つて集め、又造つたものであろうに、此れがどうなつて行くかと思うと、一寸淋しい思いがする。

十数年前グワイーラに博物学者の橋本梧郎先生が居られた頃訪ねた時、五〇センチ程の青い小さな蛇を見せて頂いたが、腹の半頃に二本の細い足があつて、前半身をささえている、珍しい物であつた。それをその後誰かがどろんどろんしてしまつたそうである。

世間にはそうした不埒な人がいるので、うっかりした陳列では無くなつてしまう。

世間には色々と珍しい物を集め保存している人がいるが、子供、孫とその趣味を引継いでくれるとは限らず、その人が亡くなると幾許もたたぬ間に霧散してしまふ事の方が多いらしい。

全く惜しい事である。

私の知人にも大変に学問的にも貴重な物を莫大な費用をかけて集めた人がいて、その品物の一部でも、一般の人に見て頂ける様な機会をと考えるのであるが、先ず盗難のおそれがあり、仲々簡単にいかないようである。

それでも私は、犠牲を払って珍しい物を集めた人の苦労を偲ぶ時、これを陳列して、一般人に見て頂く場所を設けたいものと気にしているのである。

第十二話 木を切る危険

私の家族はブラジルに着いた直後からデルーバ・マツト原始林の伐採)に取りかかり、その後長い間殆んど毎年原始林の開拓をしてきたのであった。

一九三三年(昭和八年)から始まって五二年まで、ちょうど二十年続けたのであった。その間何年間かしない年もあったが、それはホンの僅かの年の事で、殆んど毎年いくばくかの面積を開拓したものであった。他人の原始林を請負って小使い稼ぎをしたのはロンドリーナの中央区に入植した当座の二・三年の事で、後は全て自分の土地であったので畠が増えていくので楽しい仕事であったし、その為に特に弟達は木を倒す事は上手になり、どんな大木に向って

もたじろぐ様なことはなくなった。或る時は兄弟三人で十時間かかってやっと倒す事の出来た木も有った。

そうした大木が倒れる時は地響きを立てて倒れるので、その壯観、その轟昔に、それまでの疲れが一気に吹き飛んでしまう様な快感を味わっていたのであった。事実は何百年育つて来た大木の最後の悲鳴であったかも知れないのであるが。

当時は政府も個人も開拓して生産をあげなければならぬ時代でジャングルを開拓する事は誰にも遠慮のいらぬ男らしい、希望の有る楽しい仕事であった。

然し実際には危険の多い仕事ではあったのである。幸いに私たち兄弟は大した怪我らしい怪我はしなかったが伐採中に命を落した人、大怪我をした人等相当数いる筈である。

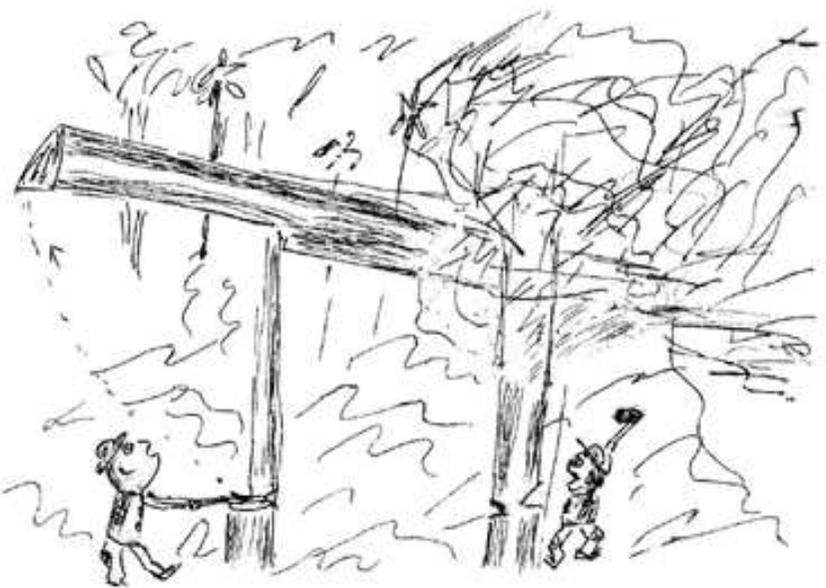
或る時どこかの話であったが、ボツボツ昼飯の時間だから弁当を持って来る者に晩のおかずは。パルミット(ヤシの一種で葉の本が食べられる)を二、三本持たせてやろうと道の方に向けて一本倒すと、既に弁当を持って来て道べりで休んでいた妻の頭の上に倒れて即死させたという話が伝わって来た事があった。

又、倒れていくヤシの木が、先方のヤシの木とヤシの木の間に倒れて、切り口が離れる瞬間に横にはね飛ばす事があってびっくりする事もあったが、やはりそうしてはねてきたヤシに打たれて大怪我をしたという話も聞いた。

又、弁当を運んできた十二才の弟が、私たちのマツ

シャード（マサカリ）で、そこに立っていたヤシの枯木に切りつけると、腐っていたてっぺんの部分が落ちてきて驚いたことがあった。

概して怪我をする時は細いヤシの木だとか枯れ木の枝が落ちてきてする事が多く、大木を切っていて怪我をする事は少ないようであった。



又、切り口から倒れないで、さけあがって危ない目にあうのも大木の時に少なく中以下の木の時に多いようであった。なまけて受けの切り込みが少ない時にさけあがるのであるが、さけ上った木が、どちら側に落ちてくるかわから

ないので恐ろしいものである。

しかし経験を積んでくると、さげ上るのを見ていて、どちら側に落ちるか見きわめて反対側に逃げる余裕が出来るのである。

昔から木挽する人は一升飯を食べると言って大変きつい仕事とされていたが、木を伐採する仕事も大変に腹のへる仕事で夕方仕事を終えて帰る時など、一寸した木の根などにつまづいてよく転ぶのであるが、疲れていて足が上っていないのであろう。

こうして一世の時代は危険できつい開拓の連続であったが、現在では、開いてはいけないという時代になってきた。

先日昔話をしてくれと頼まれて原稿を渡すと、昔話でも開拓の話は少し遠慮して他の話、例えば不自由をした話などに替えて欲しいと言われた。

全く時代は変っているのである。あの開拓に苦勞したお陰で今日が築かれているのに何か悪い事をしてきた様に思われているかっこうである。

時代の変遷とはおかしなものである。

第十三話

収穫祝

カフェーを収穫するようになってから、母の話を思い出して、労働者が二、三家族の時代から収穫じまいのお祝いをする事にした。

母の話としては、沼田家に嫁いできてみると、貧しい家なのに秋に収穫じまいをすると、思い切つてふだんに食べない大きな魚を主にして御馳走を作つて、七・八人のきょうだいに両親を加えて、男も女もみな酒を飲んで一晩を歌をうたつて楽しむのは珍しく、良いふんいきであつた。という事である。

母の生家は越前は福井の前田家百万石を誇つた立派な水田の中にそれ相当の面積を持つていたらしく、屋敷、住宅など、北海道の開拓民としての初期の生活をしてきた沼田家とは段違いの生活であつたのであるが、収穫じまいの一晩の楽しいふんいきは沼田家のような事はなかつた様であつた。

その話を聞いていた私は独立して始めてのカフェーの収穫の時から二、三家族の労働者であつたが、日曜のアルモツサ（昼食）を幾許かの御馳走をして祝つたのであつた。

当時まだ魚屋さんはなく、時たま汽車で僅かのサルジンニヤ（鰯）が運ばれて来ていたが、ほかの魚は殆んど無

かったので、かん詰のエビを二、三ヶ買って来て天ぷらにして食べようとする、じいっと見ていた労働者が、えびを指さして、此の虫は食べられないといい出したのには驚いた。

これは川でも少しは取れるが大方は海でとれるもので高いがおいしいものだから食べてみなさいと、言っても、この虫はとても食べられないと言って手をつけないので、折角御馳走してあげようと考えたものが相手の為に役に立たず、マカロンナーダ（スパゲツテ）と焼肉も用意してあったので、それで済ませてもらった。

此方がおいしいと説明してみても、子供の時から食べた事のないものではないかとおいしいと食べられないのも仕方がない。

イナゴのつくだ煮や蜜蜂のウジ、絹糸を取った残りのサナギ等々、慣れた人にはおいしく食べられても私には食べられないのと同じ事だ。

又、もう一つ、ファゼンダを手に入れてからの収穫祝いの思い出がある。

その年は百リットルの樽でブドー酒を持っていき、マカロナーダを沢山作った上にシユラスコも焼いた。

一方では飲んで歌ってゆかいな組も有ったが、ボツボツ終るかと思う頃、突然バタバタとけんかが始まった。

『殺すなら、殺せー』

と叫んでいる者、

『ようし、殺してやるー。』

と、そばにいた者が引分けたので、かえって元気を出して叫び合っているのである。

それで一人を帰し一人を支配人の家に連れ込んだのであるが、それでも簡単におさまらず、却って私たちに喰つてかかる始末である。

『お前たちは（支配人たちの事）けんかをとめて私にあっていつを殺させなかったが、明日になっても殺さんではおかない。』

と、言いつつシャツをぬいで見せるには乳首の横に少し穴があいているのであった。私が

『危なかったな、相手がもう少し力を入れてさしていたら、君も命を落としていたかも知れん、ちようど、心臓の処じゃないか。』

と、言うと、あいつファツカ（包丁）で傷つけたのではなく、歯で噛み取りやがったんだ。と、いう事であった。

とに角気が立っているので、その晩は、そこへ寝かせて、翌日は相手を呼んで仲直りさせたのであったが、労働者への収穫祝いはその年を最後として、翌年からは各家庭でするようにと、品物を配分してあげる事にして喧嘩を省いたのであるが、あの楽しいふんいきは味わえない事になった。

第十四話

母の哲学

私の父は十五、六才の頃、富山県から両親と共に北海道に移住して農業をしていた。

母は十七才位の時、親たちの都合で親戚へ嫁いだことがある。いわゆる、いとこ添いであつたらしい。母の話では、この相手の背中にコブがあつて、とても一緒に暮らせなかつたとの事であつたが、私たちには分らない事である。

母はとにかく嫁いでみたが、落ち着けないので別れると宣言すると、親は親戚の手前家には引取れないとて北海道の伯父に預けられる事になって、北海道は美唄の郊外に来たのであるが、此の伯父の世話で町の仕立屋の縫物の手伝いをして暮しを立てる事になつたらしい。そのため学問はなかつたが縫物や編物は上手であつた。

此処で父と知り合い結婚をした。

結婚するとすぐ農業で独立させてもらったが、小さな子供がいては思うように仕事が出来ないとて札幌市に出てお菓子屋を始めたのであつた。初めの十年が順調に過ぎたと問口20メートルの店を新築、四分を貸し、自分は残りの六分で商売をしていた。広い家であつたが貸した方も、私の家の方にも、茶の間に部屋が幾つかあつて十分に一家族住める様になつていた。尚、私の家にはお菓子の工場があり、職人用の居間として二階が作られていた。私も良く

その二階に寝たものである。この二階の窓から小便を
と下まで降りなくて良かったが、時々見つかつて叱ら
れた。此の家で私たちは生まれ育った。

此処から母の哲学とも言うべき話が始まるのであるが、
その前にもう少し書いて置きたい事がある。

父は長男であるのに何故、結婚すると、両親や財産を弟
に任せて独立したのか、此の点私には今もって不審であ
る。

母が親元から離れて单身遠い(当時の北海道は水盃で見
送られたという)北海道に來ているという事か、何かでそ
の結婚は相当両親の反対を喰らっていたのそはないかと思
われる。独立したと言っても近所の人の島のアレンダ(小
作)であった。それが結果から見れば却って奮発心を起こ
す事になって良かったのかも知れない。

然しこの事は私の生まれる前の事で、私が物心ついた頃
は、本家との間に面白くない空気は何も感じられなかつ
た。祖父や祖母が良く遊びに來て喜んでいた。

ここで母の話に入りたい。

札幌に出て來ても商売の経験が無いので遠い親戚を頼つ
て、少しまんじゅうや、せんべいを焼く事を習いながら小
さな店を出したらしいが……

セントロ(中央)に行く田舎の人の通り道であったの
で、カザメント(結婚式)の引物、葬式の香典返しや法事

用の引物と、注文が順調に来て、十年程で相当に儲けて、大きな家を作った事は前に書いた通りだが、次の十年で崩れてしまったと母は嘆くのであった。

母は父の油断と言うのであるが、悪くなる時には不幸事が続くものである。先ず、長男が十八才で病没する。父親には大きな打撃であつたらうと思う。二、三年して、その打撃から立直る頃、針をふんだキズからバイキンが入つて父自身の長い入院生活、それが回復して仕事が出来る様になつたが、大変な出費をしたので母が思い切つて所得税の延期願いに税務署を訪ねると、税務署が調査して、向う三ヶ年の無税処置があつたとの事であるから相当打撃を受けていたものらしい。それから立ち直る頃、今度は母が強度のリュウマチにかかり病院、温泉と、治療に苦勞する事になつたのであるから、母の言う様に父の責任とばかりは言えないと思うが、母にすれば、そうした不幸の中にあつて父が、そのウサ晴らしか、少し無駄使いをして遊んだことが大變に残念であつたらしい。

それはそれとして、今日ここに書きたいのはその真偽については自信が持てる様なものではないが、母の哲学？とでも言うか、母の私達への注意である。母が言うには、「人間には一生に一度は思いがけない程儲かるか調子の良いと云う時機がある。それは仏様が下さるものだが、その後を注意しないと引繰り返る。私は親から聞いていて注意したが夫が聞き入れてくれず十年で儲けて後の十年で失敗

してしまった。お前達は注意していけよ。」

と言う事であった。人間何処が頂点なのか、頂点にいて頂点が分らず、拡張に拡張を続けていて下り坂を徐々に、或いは急激に下って行くものの様である。

私は此の母の言葉を聞いていたので、最底線に落ちる前にかろうじてブレーキをかけられたので助けられている。無学な母ではあったが、私達子供には貴重な母であった。

第十五話 ファロツテの明かりでは

楽しみの少ない時代であったから、或る時は中央区から、と言っても各家庭から測れば二十キロはある筈の、ローランジヤ区のカフェザール植民地迄歩いて野球の試合に出かけた事もあった。如何に娯楽が少なかったかが分かると思う。

どこの植民地でも若い者の為に競って運動場を造成したものであった。

その運動場というのが野球の出来る運動場であったから大変であった。中央区の場合は土地の良い所であったから、大きなペローバの根など掘るのに大変な苦勞をしたものであった。大きな根を大きな穴を掘ってやっとな切ったも

ののトラットル（トラクター）などある筈もなく、仕方なしに脇に更に大きな深い穴を掘って引繰り返して埋めるのであったが、或る時その穴が一寸浅かったか、木の根の工合が思う様でなかったのか一本の太い根が地上に出たので、その根を切ろうとするが、容易でない。レンニヤ（薪）を集めて焼けという事になったが、生まの為に、なかなか焼けず往生していたのを私は見ていた事がある。

そんな時期に剣道初段の大西氏が居られたからか、場所のいらぬ剣道が初まった。宮崎兄弟、本多昌勝、市山太郎、大西繁雄、その他名前を忘れたが十名位でローナ植民地へ、遊びがてら剣道普及の様なかつこうで出かけた事があった。小さな二トン積位のカミニオン？ であった。

昼頃着いて、アルモツサ（昼食）から、初心者を混えて稽古をしたわけである。二、三時間稽古や指導（一応の説明など）を大西氏より受けて、後は植民者も混じって懇談となったが、久々に会う人々の話は仲々尽きず、ジャンタ（夕飯）を頂いて夜になってしまった。

さあ帰ろうと一同別れを告げてカミニオン（トラック）に乗り込んだが、さあどうしよう。車のデンキがつかないのであった。月の無い暗闇の夜である。植民地には一台の同じ様な車があった。たぶん小笠原氏の車であったろうと思う。然しデンキの球は合わなくて使えない。その内にファロレッテ（懐中電燈）があるから、それを持って右側のパノラマの上に付いているデンキをまたいで乗って前を照らせと言う人が出て、走ってファロレッテを取りに行く

てくれた。



間もなくファロレッテは来たが、カミニヨンの前をファロレッテで照らしたのでは、とてもモトリスト（運転手）の処から見えるものではない。仕方がないから、ファロレッテを持っている者が、右だ、左だと指示しながら、剣持氏と後の長谷川氏の境を片側はまだマツトだったと思う

道をカブセーロ迄出てきたら、道が広くなったので星明かりでも少しは見えて帰って来る事が出来た。途中モビメント（車の行き来）があるわけでなし、此方が道をはずれさえしなければ良いので、何時間走ったかわからないが幸いその夜の内に帰る事が出来たのであった。それにしてもいつも思うのだが、マット（森林）内ではフロレッテの明りでは車は走れるものではない。

あの時私はカミニヨンのカロサリヤの前部に乗っていて前を見ていたが、フロレッテを持った者が、右だ、左だといっても、何にも見えないから、モトリストも大変で一キロ程のエストラダ（街道）に出るだけに三十分は優にかかったのである。忘れられない思い出の一つである。

第十六話

入植拾周年祝典

一九四〇年七月、今のアセルの町のカンポで国際植民地入植拾周年記念祝典が盛大に催された。

此の時のカンポが国際植民地連合日会のカンポとして造成されていたので、遠くマリアルバ迄の各植民地の青年達までが地ならしの奉仕に来てくれていた。そのカンポに芝

居の舞台まで作っての祝典だったので、相当の賑いであった。舞台作りの覚えはないのであるが、材料は竹のまだ少ない時代、やはりパルミット（椰子）が主体であったかも知れない。相当大きな、花道も添えたものであった。

芝居は、どんなだしものがあつたのか全く解らないが、オフィシーナをしておられた内田光造氏の奥さんの指導で四、五人の娘さんが静御前か何かを演じて好評を博した様であつた。尚土俵も設けられて角力大会も催された。

角力の行司には一区植民地の宝田竹三郎氏が、祥（かみしも）と袴（はかま）に烏帽子姿で軍配を持った。本式の装束であつたから珍しかった。

あの衣装が残っているものなら、移民資料館に陳列させてもらいたいものだ。宝田氏にはあの大会が、渡伯以来初めて晴の舞台で、或いは最後の舞台となつたのではないか知らんと思う。軍配を持つての行司は重味があつて良いものと思うが、一般の大会では白い手袋ですます様になつて来ているので、もう見る事の出来ない事になつた。

宝田竹三郎氏は、今の稔君の父君である。

力士の事になると、誰が出て、何処のチームが優勝したのか、私には何の覚えもない。

その頃カンポの脇にあつた寄宿舎には舎監として渡辺重先生が居られて、寄宿生の御世話から、毎日くる奉仕の人の食事のお世話をして下さつたものであつた。その渡辺先生御夫妻も既に亡くなられてしまつた。

此の頃から人気五人男とあだなされていた仲の良い人が

いた。小笠原一二三、五十嵐正雄、平田務、松尾行蔵、今井治郎の五人である。松尾氏は若くして或る早朝アプカラーナ市で凶漠に襲われて亡くなられ、知人一同愕然としたものであった。その後小笠原、五十嵐両氏は病を得て亡くなられたが、七十才前後であったであらう。

健在は平田氏と今井氏だが、平田氏はマリंगाから近いフロレスタの近くに在住、今井氏はローランジャに住まわれていて、相変らず人の御世話に明け暮れている。

カンポ作りや、この十周年の祝典などの中心は、或いは此の五人組が基本の計画を練って居られたのかも知れない。とにかく小笠原氏は人を引き付ける魅力のある人であった。

一寸気になるのは此の国際植民地の入植拾周年の祝典が、実際の入植より一年早いことである。

草分けは中央区へ入植する荒長十郎氏の家族が移転してきてファゼンダ・コアツチに契約農として入ったのが、三十一年の十月八日とあり、それより一週間程遅れて十五日頃に一区植民地に原国次郎、風早慶味、早坂幸太郎氏らの三家族がロンドリーナに到着され、直ちに一区に購入してあった土地に小屋を建てて移られたから、此の四家族が開拓の草分け者と言うべきであらう。

然し国際植民地にはそれより先に土地を買った人がいる。いわゆる北パラナ土地会社が創立されて、土地が切り売りされる事になって第一陣にドイツ人の一行が視察に来

たが、余りの奥地で恐れをなしたか土地は買わずに帰ってしまい、それから二週間後に、土地会社の日本人部総代理人の氏原彦馬氏が、日本人の第一回の視察団を、ソロカバナ線サンタ・アナスタシオ在住の人々で組織し、カンバラで勢揃いしたそうだ。

氏原氏は出迎えに出る。サンパウロ市から「農業のブラジル」社長、揮旗深志氏も加わって一行十一名。ここから当時の道二百十kmをカミニヨンで走って一九三〇年三月十六日ロンドリーナに到着、早速視察した結果大原正治、富田正彦、丹俊夫、大原貢、山手寿一、山崎茂心の六氏が計八十アルケールの土地を購入した。

これが北パラナ土地会社の国際植民地としての諸外国人の中での第一回の売買契約で受取りの第一番から第六番迄に記録されているとの事である。実に五十五万アルケールの開拓の先鞭であるから、入植は少し遅れていても草分け組に数えられても当然と考えると、入植十周年祝典はそれで良い事になる。

いずれにしても日米間の経済問題等も、険悪になって来ていたことが洩れてきていたので、あの時に祭典をしていなかったら翌年では出来なかったであろう。

翌年の十二月八日にはついに戦争に突入したのであった。

第十七話

帽子と靴

此の頃の人は、正装して出掛けるのにネクタイをする事も少なく、帽子をかぶる人はなお少なくなった様である。知人の埋葬にさえ、ノー・ネクタイの人が多くなって、帽子をかぶっている人など、まずいなくなった。

その代りに普段にボネを使用する人が多くなっている。ボネは日本人の運動帽だが、運動する青少年の専用物の観のあったものが、最近一般に普及して来たのにはどういう理由があるのだろうか。安くて、簡単で、便利だからであろうか。とにかく、伯人間に迄大いに利用されている。

諸種の商社、銀行などで、宣伝用に配布するので、私は買った覚えはないが、何時も数個のボネは棚の上に置いてある。

入植当時を振り返って見ると、仕事には、麦藁帽子をかぶり、半分位の人はラシヤの中折れ帽子の古くなった物をかぶっていた。

正装して出る時は、必ず、ネクタイに、中折れ帽子で出かけたものであった。

農村のカザメント（結婚式）は俄か造りのバラツカで屋根は近処からエンセラード（防水ズック）を集めて葺き、壁は落し物をする時のよごれたパンノ（布）で間に合わせ

てあつたが、柱から柱に、リップ（棧）を打ちつけて、必ず帽子かけが用意されていたものである。

どうして、あんなに帽子をかぶつたのかと思つて見ても仕方がない、何ともおかしな事だが、そういう時代であつたのである。

そうして利用するから、古くもなつて、その内に仕事に行くのに一寸頭にのせて行くのが出来るのであつた。

このラシヤの帽子で面白い思ひ出が一つある。或る時ジープで田舎道を走っていて、ラジアドールの水が不足して沸騰してびっくり。車を止めて、近くの水溜りから、この帽子で水を運んで間に合つたことがある。

処が次にガソリンが無くなつて止まつた時、通りがかりの車にお願いすると、入れ物が有るかという。早速帽子を思ひ出して、これに二杯程とお願いすると、よしきたと、分けてくれる事になつたのであるが、入れて「びっくり」水の洩らない帽子から、ガソリンは「ザア。」と見事に洩つてしまふのであつた。

水とガソリンは同じ様な液体ではあるが性質は全然違ふ物である事が分かつた。

水とガソリンは同じ液体でも全然違ふ性質であるが、それと同様に正反対の様に思われるものが、仲良く同じ店に陳列されて売られていることを、移住してきて異様に思つた事がある。

その一つは帽子が、その頃は大方靴屋さんで売られていたことである。頭にかぶる帽子と足にはく靴が同じ店で売られているので、私はおかしな習慣の処だと思ったが、そういう国だから仕方が無いのである。

それにしても帽子と靴に、どういう一致点があつて、同じ店で扱われる事になつたのであろうか。

勿論他の店でも少し置いてある店もあるにはあつたが、殆んどの靴屋さんは帽子屋さんでもあつたのである。

帽子は楕円形の厚紙の箱に一個宛納められ、さすがに棚の上段に置かれてあつて、靴と並べて置いてある様な事はなかつた。

此の帽子の箱が移民時代の貴重書類の保存箱に利用されていたのは私の家だけではなかつた帽子と靴が同じ店で売られていた事は、何んとも面白いコントラストであつたが、いつ頃から帽子が靴屋から消えていったのであろうか。

いや靴屋からというより一般社会から消えて行つたのである。

第十八話 竜巻



世の中には地震、台風、暴風雨、龍巻、大水、崖崩れ等々色々の天災があるが、ロンドリーナ地帯は割合に少ない。五・六年前にイガツポ地帯を西から東に向って相当な風と雹が襲って、町の並木をかなり倒したり、窓ガラス等を割ったりしたが、人命に関しての被害はなかった様であった。

私の娘の嫁いでいる家に被害があったというので行って見たが、並木も枝は落されていたが倒れておらず車で行く

事が出来た。

途中でかわいそうと思ったのは、木に止っていた小鳥の死がいが沢山落ちていた事である。

娘の家では雹の吹き付けた側の窓ガラスが全部割れて、窓際のベッドの上に落ち、その部屋は大変であったが誰も怪我は無くて助かった。

ロンドリーナでは、此の時の被害が天災としては大きい方ではないかと思う。

私は四十年程前、グレーバタペジャラという、ロンドリーナから二五〇キロ位の処に土地を買って開拓した事がある。その土地は空から見て買ったのであったが、後日地上をジープで通う時道路の悪いのに随分困難したものであった。アレーヤ地帯の道のいたむ事は、テーラ・ロツシヤ地帯では想像もつかない程である。

然し私はここでそんな事を書くつもりではない。

その悪路を初めて自分の買った土地へ向って行った時、私の土地の手前五キロ程の地点で驚いた事がある。

その道の片側に一〇アルケール（約二十五町歩）位暴風雨によるデルバーダ（伐採地）があったのである。大木は殆んど根から倒れていたが時には、巻風の為に途中から「ねじ切れ」ているものもあった。余りの物凄さにジープを止めてしばらく見物した事であった。このまま火を付ければ忽ち畠になる状態であったが地主は、気が付かなかつたのか、再びカツポエラ（再生林）になってしまった。自

然の力とは恐ろしいものだどつくづく思わせられたものであった。

それから数年過ぎた頃、タペジャラーラからシアノルテに出、何かエスクリツーラ（地権）の登録でもあったのか、カンポ・モロンを廻って帰って来た事があったが、エンジン・ロ・ベルトロンの町を出たすぐの所に五アルケール位のジャングルが、やはり暴風によって倒されていた。直径六〇センチ位のマルヒンの木が地上十米位の所で「ねじ切れ」ていたので、あらためて、自然の偉力を感ぜさせられたのであった。此の時の風に倒された中央に新しい家が一軒あった。良くそのまま残っていたものである。もしその家を訪ねてみれば或いは何メートルか風の為に「ズラサレて」いたのかも知れないが、そこ迄は行く事をせずに、「もし家人がその風の時にいたならば相当に恐ろしい思いをされた事であろう」と、話し合いながら通り過ぎて来たのであった。

もう一つ「龍巻」で思い出す事は、私が或る日フアゼンダ（耕地）に行くと、カマラーダ達が、

「先日空から魚が降って来た。」

と、珍しそうに話すのであった。また実際に珍しい話である。発電所のレプレーザ（ダム）かどこかで、巻風が巻き上げて来たものであろうが、魚には大難である。経済的には霜害も大変であるが、瞬間に人命を失う地震、大火、大水、暴風雨等の被害に比べれば耐え易い。

此の点を思う時、此のロンドリーナ地方は気候は良し、地味は良し、その上に天災の少ない処で喜びたい。

第十九話

物の値だん

日本から希望してきた、セツテ・バーラス植民地に将来の希望が持てないので小使いのある内にと、急いでロンドリーナに移っては来たが、デルーバ（伐採）の終る頃に資金が欠乏して来たので、お客用のふとんや、懐中時計等を売って凌いでいる時、思いがけない事がおきた。

一九三四年には相当大勢の日本人が移動してきたので、前年度に来ていた人の収穫した米が無くなったらしく、七ミル位のカスカ（粃）が二十七・八ミル迄になったのである。白米も十四・五ミルのものが五〇ミルとなった。開拓の力仕事に食べきかりの子供が大勢いる我が家の家計にとつても一大事である。

しかし捨てる神あれば救う神ありで、五〇ミルの白米が八十ミル百ミルとうなぎのぼりに高くなるかと考えて、十俵か二十俵かは知らないが買い込んだ人がいた。

ところが五十ミル迄急激に上った相場がボツボツと下がり出したのである。私たちは喜んだが、買い込んだ人は気

が気でない。或る日、隣の松原氏が

「知り合いが五〇ミルのセパレード（一級品）を買い込んで困っている。もしお金が不自由ならば、その米を来年払いで、あの人の払った五〇ミルで買ってはどうか」

と、連絡して下さった。

父母は喜んで、

「私もお金があったら、同じ様に五〇ミルで買い込んでいたかも知れない。来年払いで良いのなら是非お願いしたい。」

と話は決まり翌日母が実印（ハンコ）を持って、松原氏と出かけ、父は私たちとデルバーダの方へ仕事に出かけた。夕方帰宅すると、土間に五俵のセパレードが積み重ねられてあった。むこうの人がカロセーロ（馬車追い）であったので、二つ返事で運んで来て下さったとの事であった。



それ迄メーヤ・アロース（半分砕け米）やキレーラ（小米）のご飯であったからセパラードの御飯は、うれしかった。

此の五俵の米のある内に新米の収穫となり、見事な豊作であったから、白米は二〇ミル位に下がったが支払いには何の苦勞もなかった。

数年前にアマゾン流域のトメアスー植民地の開拓当時のビデオを見た時に、移民を世話した会社が、移民にフォルネーセ（支給）した米価が高く、移民が原始林を開拓して植付け、収穫して、会社に出荷した米価が三分の一位の値であったと、移民が激昂して、会社に談判する一場面があったが、殆んど米を食べない地方に一度に相当数の日本人が移住した場合には、何処でもおきた問題の様である。事情が解らないと腹も立ち、或いは予算狂いで大変な事にもなるのである。

一九四九年の事であった。六月始め頃からか、カフェーの値段が日に日に上り出しコッコ（カラ付き）百ミルの値が百五十になると、収穫中のものまで前売りする人が出て来た。毎日買手がシツチオ（農家）迄買い付けに走り廻ったのであった。

私の処でも少し売ろうかと思つたが、借金があるわけでもないので、収穫の終る迄待てと考えて売らずにいと、値は下がらずに、益々上昇して二百ミルにまでなった。百

五十ミルで前売りした友達が、一生けんめい収穫して五〇ミルも安く渡さなければならぬかと思うと張り合いの無い物だとこぼしていたが、思い様ではそうかも知れない。

幸い私の家では一俵も売らずに、新しい倉庫一杯にしてグワルダ（納めた）していたので最高値で売れ、或る程度まとまった金が入る事になったので、仕事を拡張する事になったが、親戚になったばかりの老人が、

「物の相場が急激に上った時は、気を付けないと危ない、若し新しい仕事に手を出すなら、先ず持っている物を早く売って現金を作って置く事だ、暴騰した相場は暴落する危険性がある」

と注意してくれた事が私の生涯の支えになっている。

第二十話

あの優勝旗はどこに

私は一九三四年にロンドリーナ郊外の中央区に入植したのであるが、中央区には既に入植していた人が沢山いたが、草分けは三十二年で、誰が早かったのか私は知らない。

三十三年（昭八）になると二組の大方の人々は会社の道

あけが待ちきれず、ムダンサ（引越荷）をコアチ耕地迄運んでもらって、その日本人の契約者の物置き小屋に一旦預けて、そこから原始林の中を背にしよって何回となく運んだとの事であった。

私達が三十四年六月半に来た時、コアチー耕地の保有林で残してあった処が売り出されてそこを買って入植したのであるが、その遅れて入った私達の地区が、中央区植民地の第一組と命名されている事は、私たちの入植後に中央区が植民地として組織されたものである。

早や、その年の暮頃にはヤシの木を割ったものを壁として掘立小屋を立てて日本語学校が始まった。初代校長兼小使まで兼ねた佐藤某という年配の背たけの低い先生であった。

そして年が明けると三十五年早々青年たちの為にと野球のキャンプ作りが始まるのである。国際植民地に野球チームの一つもない時代に何故そんなにいそいだかというと、北パラナの入口のカンバラ、サンタ・マリアーナ、コルネリオ・プロコピオ、バンデイランテス方面が早く開拓されていて、既に幾つものチームが出来ていたのであった。野村農場や、ビーラ・ジャポネーザという植民地もあった様である。

中央区が野球場を作ると、ロンドリーナ市から見て中央区とは反対の方向にあった一区植民地にも出来た。間もなく、隣り町のノーバ・ダンシンの郊外のカフェザール植民

地にも出来て、交流試合で楽しめる様になり三十七・八年頃には北パラナ大会という名前で賑ったのであった。

私は少年時代が弱かったので自然青年時代になっても野球も陸上もしなかったが、兄は何時もファーストに立っていた。

当時の北巴（北パラナ）大会にはロンドリーナは混成チームで出場していたのか兄は毎年の様に出場していた。その内の或る年の大会にかろうじて決勝戦に残った。ところが、その決勝戦が、手に汗握る大接戦を繰返したので、観衆も一球一球に湧き上る状況で久し振りの大盛会となり、勝敗が決定すると両チーム共、オイオイと全員が泣いたという事であった。

そして久し振りに頂いて来た優勝旗を、その後十余年して当時の選手が数名何かの都合で集って昔話に花が咲いている時、中の一人が、

『ー そう言えば、あの時の優勝旗どこにあるかな、あの優勝旗はカフェー用のエストツパのサツコ・バジウ（粗末な空袋）を利用して素人が作ったものだったかなあ……』

『あれば博物館行きの一級品だがなあ……』
こうして重要記念品は無くしてから気の付く事の多いものである。

それにしても、エストツパ（麻）の空き袋で北巴大全の優勝旗を作って勝ち負け双方を感激で泣かした大会、今では味わえない開拓当時の思い出である。目に浮かぶ様であ

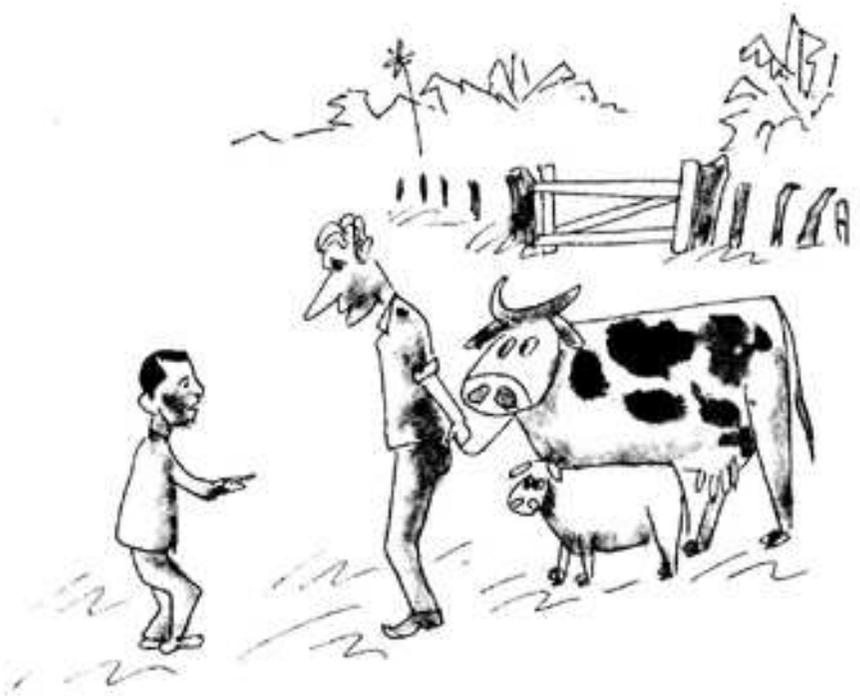
る。

泣いた青年達も殆んど他界されてしまった。御冥福を祈ります。

尚当時サンタ・マリアーナであったと思うが、千綿徳蔵と言われたか、熱烈な応援をする人がいて有名であった。ロンドリーナにもあの様な人がいてくれたらといつも話題に上って居たが、野球界に残る一番の名物男であるかも知れないが、どこかに書き残されているか知らん。

只野文児、江原政寿―忘れてはならない人々も忘れられて行くのが世の中と思うには何んとも淋しい思いがする。誰か筆の立つ人、記憶の有る人に記録を残して置いて欲しいものである。

第二十一話 ヨーロッパ人の一面



私は或る年思いがけなく、日系植民地からはずれてドイツ人の植民地の中にポツンと一家族既成カフェザール（コーヒー園）を買って移った。地権を譲り受ける時地主が来ていたが、子供がなく年にもなったので売る事にしたと言う事であった。

このファゼンダ（耕地）は地主が住んだ事のないファゼンダで、支配人も、通いで幾つものファゼンダを見てい

て、住んではいなかったの、住宅も無ければ建てる場所の準備もなかった。

一九五〇年三月十五日弟らと共にムダンサして行ったが、家具を入れる家が無かった。カフェザールの終ったすぐの所に平らな地面がありバタタ（ジャガイモ）が植えてあったので、そのバタタの上にムダンサをおろして、エンセラード（シート）をかぶせ、人間は七・八十メートル離れた所の一軒のコロニヤ（労働者の家）にとりあえず居を定め、早速住宅を建てる事にした。フレーザから大工さんとして大久保薫君と、親戚になったばかりの西川さんに手伝ってもらって、一週間で家の屋根を葺いてムダンサ（引越し）したのであった。マデーラ（木造）の家であったが、ムダンサを入れると窓や戸は大工さんに任せて私たちは、ルアソンに出かけたが、そこでビックリ仰天するのであるが、それは項を改めて書く事にする。

その時から私たちは、日本人の植民地から、ヨーロッパ人の植民地に移ったので、どうしても、ヨーロッパ人と接触する機会が増えて来たわけである。

南隣りは英国人、西隣りはドイツ人であった。北隣りは不在地主で、東隣りは河をへだてて道も無く、遠くもあって往来はしなかった。

先ず交際が始まったのは南側の英国人であった。弟の嫁さんに赤ん坊が産れたが乳が少ないのでレイテ（ミルク）を分けてもらいに行ったのである。ところがこの英国人が

毎朝取りに来るのは大変だろうと子連れの牛を貸してくれて助かった。後に清算に行くと、あなたの処で、子牛が大きくなったので、それでよろしいなどと冗談を言う鷹揚な人であった。

そのうちに西隣りのドイツ人と縁が出来た。私たちが毎日のようにアストルガ方面からマデーラ（木材）を運んでいたので、自分にもコロニヤ（労働者の家）一軒分の製材を運んで欲しいというのである。

私の仕事をしている大工さんに見積りをさせてその一軒分を運んだのであるが、後日、ビーガ（ハリ用材）が一本残ったが、なぜ一本余分に買ったのかと聞きに来て、私もびっくりした。

家一軒建てるのに、ビーガの一本や板の一、二枚の余分も買わないで、大工の切りそこないやマデーラ（木材）のデフェイト（キズ物）などあった場合の事を考えないのだろうか、と、思いながらもドイツ人の計画性というか緻密な考え方を教えられた思いであった。英国人の鷹揚さとは大違いであった。

それでもヨーロッパ人として似ているところは住宅と庭の作り方である。家の周囲にいずれも森林を残すか、開拓された後に建てる場合は森になる様に大きくなる木を多く植えるのが好きである。

そこへ行くと、日本人は、木を植えない事はないが、日本人の植える木は殆んど、食べる実のなる果樹が多い。あ

るいは軒下から畠である。土地が少ないのと経済の苦しきから、そうした習性が出来てしまっているのかと思う。

近所の某耕地で、約半アルケール（一町二反）位の森林の中に、下草を払ってグラマード（芝生）にして、住宅、事務所、倉庫などゆつくり建ててあると落ち着いた感じがして訪ねてみてうらやましい気がする。経済が成り立っていれば良いのだから、此のヨーロッパ人の様な落ち着いた生活を見習う必要があると思う。

第二十二話

動物愛護

ファゼンダ（耕地）からの帰り道、カプセーロ（高台）の道まで出ると、車を止めて、何かごそごそしている人がいるので、此方も車を止めて、近よって見ると、四・五キロ位のかわいいカピバーラの子を捕えて、サッコ（袋）に入れようとしているところだった。

その頃は、動物を見れば捕えて食べる時代で、どうと言う事はないのであるが、かわいそうにと思いつながら見過しただけの事であった。

その後ほとんどマツト（森林）は拓かれて、殆んど無くなり、まとまったものとしては私の所有地に一ヶ所三ア

ルケール位残してある位で近くには見当らなくなつて来た。

此の三アルケールのマットに近所の外人たちがカツサ(獵)に来るので、動物らしいものは全滅していた筈である。

時々、ローランジャの某ファゼンダのレゼルバード(保存林)にはカピバラーその他自然の動物が殖えている話を聞いて、私は、ミスタドール(支配人)にマットに入つて動物を見つけても捕えてはいかんと注意をすると、此の頃はカツサに来る者など誰もいない、動物もいなければ、農薬で魚もいなくなつたという事であつた。

世の中、開拓されて行くと共に、又、一面では淋しい事がおきて行くものかと考えさせられていた。

と、或る時、隣の耕主が、パスト(牧場)の中のブレイジョン(湿地)の、雑草で牛も入らない状態になつてゐる処の中の方を少しばかりリンパ(片付)してアロース(米)を植えた。

ブレイジョンであるから、良く出来たので喜んでゐると、実が入つて色づいてくる頃になつてから、カツピバラーが来て、片っぱしから食べていき、何程も残らなかつたという事であつた。

マットは遠いのに、川を伝つてくるのか、又は、川辺りのヤブにでも巢を造つて暮しているのだろうか。

この隣の稲作を見ているのに今年は、私のマットには

ビッシヨはいないという観念からレゼルバードに近いパス
トの中のブレーションを拓いてアロースを植えた。労働者
の食料になればと考えての事であった。

ところが出穂となりやがて色づいてくるとカツピバーラ
の出現となった。

隣の川とは全然別の川であるから、隣にいたカツピバー
ラの一族ではない。やはり捕り尽くされたと思っていた
が、捕り残しがいたと考えるしかない。それが相当数に繁
殖しているとところへ、恰好の餌を作って提供したのだか
ら、今年は一層増加する事になるだろう。

自然保護自然保護と言われなくとも、私達にも、絶滅さ
せたくない気持はあるのだが、一切捕獲まかりならんとな
ると、これ又大変である。

来年はこの畠に継続して植えたくない。植えても全滅は
明白である。然し植えなければ、彼等も餌を捜して高い方
へ侵攻？ してくるであろう。

結局、動物愛護、自然保護の運動は、農家にとっては相
当の被害になることもあるわけだ。

大豆の蒔付、小麦の収穫頃のハトの害なども大変なもの
がある。

蛇が蛙をねらう、蛙がナメクジを喰う、ナメクジが蛇を
ねらう三すくみ、という事がある。

全ては、何かを犠牲にし、何かの犠牲になっていると、
いう事であるから、損害を少なくする為には、又取れない
アロースを植えてやらなければならぬのか。植えれば、

近い処に餌が出来て、更に繁殖する結果になって行くかと思ふと気が重い。

自然保護も程々にして貰えないかと思ふ此の頃である。

第二十三話 ジャボチカーバ



一九三九年からフレーザ植民地の土地の開拓にかかった。当座は通い作りであつたが、三年程してから、ここを

弟三人で貰う事になって、ムダンサ（引越）して来た。

家は上田一郎という大工職人が、セラリヤで切り込みをしてくれて、後は私たち兄弟で建て上げたものであった。

三、四年の通い作りの間は、道べりに四時間程で立てたオガミ小屋。三角に立てて。パルミットの葉で屋根をふいてパレーデ（壁）の無い小屋で二年程過した。今頃フアベラ（貧民窟）に行っても無い様な小屋であった。

それからの二年程は百メートル程畠の中に入って、カフェーの間に二メートル半に四メートル位の小屋を建てて移った。カベは一・五メートル位のパルミットを割って立て、屋根は桎でふいた。前の家は、奥には福治家が一軒しかいない行止りの道ではあったが道べりでそこへ訪ねてくる人もあるので、百メートル程中に入ったら気楽であった。気楽と言っても、カザードノーボ（新婚）の私に二人のきょうだいに住んだのであるから大変である。勿論一部屋である。

こうして四、五年不自由な生活をしたから、その後で一人前の家に移った時のうれしさは人一倍であった。

此の家に落ち着くと少し果樹を植えようと先ずラランジャ（ミカン）、桃、リンゴを何本か植えた。私は手入れは横着であったが、植えるのは好きであった。

その内に家の横に小さな池を作った。金魚の代りにリモエーロの川から小魚をとってきて四、五匹放しておいた。

その池から近い所にジャボチカーバ（木ブドウ）の木

を二、三本植えようと思って、或る日苗を買いに出た。苗木はどこで売っていたか覚えがない。とにかく苗を取扱っている人に

「ジャボチカーバは何年位したら実るか」

と、尋ねてみると、

「十五年位はかかる。」

と言われたので、びっくりして、それでは考えてみようと思わずに帰って来た。

何しろ、戦争が始まっていたので、戦争が終ったら日本に帰る事になるだろう、それまでに十五年かかる筈が無いと思っただけであった。

それでも何か気にかかる。桃栗三年柿八年という諺はあるが、十五年とは、いかにも落ち着いているものかなと思いつながら、まてよと考え付いた事があった。ロンドリーナに移って来て良い土地だと喜んだあの時に気がついて、もし植えていたら既に十年で、今植えている果樹の実る頃にはジャボチカーバでも実るのである。

よし植えてやろう。植えて置けば、私が食べられなくとも、後の人が喜ぶだろう。と、考えなおして、再び町に出て苗を三本買って来て植えた。

一般の苗木が五ミルの頃、小さな苗で十五ミルであった。

それから四、五年した頃、好運が舞い込んできて、此の土地を手離して移転する事になった。

ジャボチカーバの実を見る事は出来なかつたが。行く所行く所にジャボチカーバの苗を植えたので、今では、どのロッテにも食べ切れない程の実りを見ている。

此の頃はジュレーヤ（ジャム）の作り方を習つて、作る事になっているが、案外に簡単に出来て、美味である。

尚追記して置きたい事は、最初に植えたフレーザ地区のジャボチカーバであるが、此の土地は兄に譲つたので、後年此の土地を訪ねる機会が度々あり、しばしばジャボチカーバの時期と出会い賞味しながら、植付けた当時の事を思い出すのである。

それからは、年数のかかるものは早く手がけておこう、早く結果の現れるものは、少々遅れても構わないと思う様になつた。

第二十四話

一番良い方法

入植当時、竹を植えたいと思つて、苗をもらいに知り合の所へ行ったら、少し土を掘つて土の中で親株からはずして倒し、八十cm位のところで切つて、立派な苗らしい苗を取つて下さつて、「こうして植えるのが一番いい方法で、大丈夫根付きますよ。」と言われた。なる程うまく根付いてくれた。

その後誰かが私の所へ苗をもらいに来たので、同じ様にして取ってあげようとしたら、そんな面倒な事はしなくて良い、鋸で地面の上で切ってもらえばいいのです。竹は少し古い、枝の良く出ているのが良いと言って根を掘らずに、竹を一本倒して、一メートル程に切って四・五本持っていていかれた。

此の苗を、土の中にねかせて埋めて枝を地上に出しておけば、大抵、根付いて、芽が出て来ます。これが一番いい方法です、と言うのである。

その頃竹の子を食べる為に孟宗竹を植えたいと思って苗を貰いに出かけた。此処では孟宗竹と言っても日本の本当の孟宗ではなく株になる分で、人によつては印度竹とか言う人もいるが、未だに本当の名前は知らないで暮らしている。

此の竹の苗を貰いに行くと、その人は、枝の出ている節の下側で切って、その節と共に、三節目の下側で切ると、一番上が空になつていたので、立てて植えて、此処に水を一杯入れて置くと、その水の乾く頃に新芽がでてくるので、此の方法が一番いいですよと教えてくれた。

そうした色々の植え方で植えてみるが、運が良い時には良くつき、運が悪いと殆んど枯らす事もあり、そのパーセントは五〇%位であった。

その内に上の一節に水を入れておくと言う事から、弟が

ヒントを得て、水を入れた上に更にリットルビンに水を一杯入れて逆さに差し込んで置くと、その水が無くなる迄に相当の日数がかかり、その内に芽が出て来るので弟はこの方法が「一番良い」と、いうのであった。

ところが四年程前にゴルフ場に此の方法で数株植えてみたが、半分は枯れてしまった。

ところがところがである。昨年前代末聞の一番良い方法が解かった。私が六〇年目にして見付けた珍しい方法である。

昨年二月頃四〇株以上植えたのだが、発根したか、どうかと思われる時にあの大霜に見舞われながらも九〇%以上の活着であり、今まだ一ヶ年というのに、はや四メートルもある様なブロット（芽）を出している株もあり、全く見事な成績で驚いている次第である。

全くこれこそ一番良い方法であると書きたいのであるが、私が此の文で書きたい一番良い方法というのは、竹苗の取り方や、植え方ではないのである。

我々が日常生活の中で、度々

「これが一番良い方法だ。」

と、言う言葉を使い過ぎていると思うのである。

何人か集まって、何かをしようとすると、

「それは、こうするのが一番良い方法だ。」

という意見が良く出てくるのだが結果は、何も一番良い事になっていない事が大方なのである。

此の言葉をお互いに、少し考えなおしてみてもどうかと提案したかったので、竹の苗の話は添えものである。

それでも最後の苗の取り方を参考迄に一寸書き添えて置くと誰かの役に立つかも知れない。

一、今迄の私の習慣では竹の苗は太くても細くても、少なくとも二節はいるものと思っていたが、実際はその必要が無かった。

二、竹の子を切り取った根から芽を出しているものが沢山ある。それを取るのだが、マツシヤード（マサカリ）で竹の三分の一位にその芽が付いてくるように打ち込むと竹の根は割れて いかずに、ボコツとおれてくるのである。そのかけて取れたものをそのまま植えると良くついてくれるのである。かけて取れるということは、竹の子を取った後の早い時期である。

三、但し私が取った時期は、その節の所に新しい、白い根が出ていた。此の白い根の出ている時期が秘訣だと思う。去年は二月であったが、今年はまだ四月になったのに未だ新根を出して来ないので、年によつて随分差のあるものだと今年始めて解つたのである。

・・以上、苗取りも簡単で、発芽率が良い竹の植え方の一方法の紹介。

第二十五話 中央区のグラウンド作り



中央区は一九三二年に入植した人はいなくて三十三年からではないかと思うが私には分らない。三十四年五月下旬に私たち三家族（沼田、大西、加藤）が来た時には、二組に今川、緒方、平田、榎枝、角本、頼則、吉村氏等が拓かれた畠があり、松原、天野、西谷氏等はフアゼンダ・コアチーから通って拓き出していた様であった。二組の小野、板倉氏らも三十三、四年に入植したのではないかと思う。というのはカブセーロの山焼きを一緒にしたからであ

る。

こうして見ると三十四年には急速に拓かれた事になるが、そうであつたらうと思われるのは、私たちが入植した三十四年の五月末には一組と二組の間の道が、本多さんや市山さんの方からあけられてきて、石川さんや私のロッテの辺は、道路の中だけロッサ（下草刈り）して、その刈つた卓を両側にエンシャード（鋤）でかきよせてあつた。道は歩けるが、立ち木はそのままというわけである。道路作りの人夫は片方から順々に木の根を掘り起こしていったのであろう。

デルバーダ（伐採）の終る頃には道路は開通していたのである。

それが一九三四年だから、三二年の開拓者はおらず、三年から拓かれたのではないかと思うのである。

早い人が三十三年からの入植で三十四年には早や、学校を建て、カンポ作りに掛かつたのであるから、当時の親達の子供や青年に対する教育感の強さには頭の下がる思いがある。

そこで本題のグラウンド作りであるが、目的は野球であるから相当の面積が必要である。国際植民地の場合その上に土地が肥えているのである。カンポを造るのに土地の良し悪しは関係がなからうと思うだろうが、土地が良いと大変である。

何故かと言うと土地が良いと大木があつて、そのトツコ

(根) 起こしが大変なのである。今日の様にトラットールが無いので、全部エンシヤドン(鍬)とマツシヤード(斧)に頼るのだから全く容易ではない。更に苦勞をして掘り起こしたトツコ(根株)を、どう処分するか、トラットール無しに掘った穴から出す事さえ出来ない大きなものが何本もあるのである。レンニヤ(薪)を積んで焼けばと言っても倒したばかりのまだ水気の多い根であるから燃えない。そこで最後の知恵は、脇に大きな穴を掘って埋め込む事であった。

この穴掘りが又、大変なのであった。根の張り工合で見当違いすると太い根が地上に残る。それが仲々切りにくいので苦勞することになる。

こうして開拓当時の忙しい時期に大きな犠牲を払ってグランドを作り、学校を建て、その将来の維持費の為と二アルケールのカフェをフォルマ(育成)して将来を計画したのに、時代が変わるとそこでは維持する人がいなくなつて残つた植民者が苦勞する事になるのだから、世の中とはおかしなものである。

然しその中央区植民地の共有地がロンドリーナ市に移管され、イビポランとの境近く、CEASA(公営野菜卸市場)の隣接地に六アルケールに拡張され維持利用されているセントラル・ルビアセア協会の敷地である。

会員の今少しの増加を見て、ルビアセアの別のところに所有する共有地を売却して、会館が建設される予定になつ

ているのである。

ルビアセア植民地も入植数十年を経て、中央区と同様、植民者が減少し、教育を受けた若い者が植民地に残らなくなり、植民者による共有地（グラントを含む）の維持が難しくなつて来たのであつた。

世の中の移り変りというものは予想のつかないものである。

（注） 此の項書き終つてから判明した事であるが、中央区二組の今川加麦太、平田利夫、小野佐平、板倉芳雄、吉村幸治、頼則栄氏らは三十二年の入植という記録があり、従つて此の人達はピツカード（測量にあけた堺）をムダンサ（引越荷物）を背負つて入植されたわけである。いやそれだけではなく、二カ年の収穫物の売却も道の有る所まで背負つて出さなければならなかつた事であらう。そうした苦勞が開拓者を強く育てたのかも知れない。

第二十六話

汽車の旅

一九三四年五月、私たちがムダンサして来た頃、汽車は、ジャタイが終点であつたが、翌三五年六月にはロンドリーナ迄来る事になつて十四日には開通祝いが催されたのだが、私はそれを知らず、その直後町に出ると知人が、

「開通式は大変に賑った。集まった人にサルシーシャをはさんだ、サンドイツシが振る舞われたが、それを貰うのに大変であった」と話してくれた。

リングイサ（腸詰め）は沢山あったが、サルシーシャ（ソーセージ）は珍しかった時代である。

さて汽車はロンドリーナ迄来る事になったが、その時、あの美しいエスタソンは出来ていたものであるうか。私は建築現場を見に行った記憶はあるが、汽車の開通式に間に合ったのかどうかは覚えがない。

あの急傾斜の屋根の瓦を葺くのに職人が一枚一枚アラメ（針金）で、リップに止めていたので、今迄急傾斜の屋根を見ては、どうして瓦が止まっているのか不審に思っていたなぞが解けたのであった。

汽車はロンドリーナ迄来る事になったが、休むことなく更に延長工事が続けられていた。駅からコアチ耕地迄は殆んどマツトの中を鉄道工事が進行していて、私達はキンチーニヨ迄出ないで未完成の鉄道用にあけられた処を歩いて町に出たものであった。

コアチーの中はカフェザール（コーヒー園）の真中を通ったのであるが、文明が開けて来て喜ぶと共に思いがけない迷惑も伴って来たのであった。

当時の汽車は沿線のレーニヤ（薪）を利用して走るの
で、火の粉を飛ばすのだが、コアチー等、デルーバして四、五年経ているので、倒した木は腐っていて、至極簡単に火

がつくので、少しセツカ（天気）が来ると火消しが大変。その弁償がどうなっていたかは知らないが、当時の事であるから、泣き寝入りではなかったかと思う。

私もセツカの時に此の汽車で旅行をした事があるが、随分と畠に火が付いていたのを見た覚えがある。

ところが畠に火が付いて困る人がいるかと思うと、その汽車で旅行をしている人の着物にも火が付くので、往生するのである。坐っている前に火が付けば、すぐにでも気が付くが、背中の方につくと、着物が焼けて “ヤケド” をする様になってから「熱い」と気が付くので大変である。

暑い時には窓を閉めておくわけにもいかず、その為脇に置いた外套に火が付いて、煙があがってから気が付けば、火を消しても穴はあいているので嫌になる。それが自分だけでなく、あつち、こつちで、「アチチ」「アチチ。」と、やっているのであつたが、そんな汽車でも、来てくれる様になって喜び、ジーゼル車になる迄、相当長い間走つたのであつた。

昔の汽車の旅で思い出になる事に、その時間表がある。時間表はあるのだが、時間通りに来る事は殆んどなく、大体おくれるのである。客の方もものんびりしていて余り文句は無かつたのではないか。或る時、知り合いの家を訪ねた時、主人がサンパウロへ行く用意をされていて、「ボツボツ時間だが、今日はいくら遅れるか聞いてこい。」と、

言つて子供を駅までききにやったことがある。

また或る日、時間通りに到着したので駅の近くの人たちが珍しい事もあるものだと思つていたら、昨日の汽車が着いたのだつたと言う事であつたという。此れは作り話であるかも知れない。

又、此れは事実かも知れないのだが、駅に来て待つていた客が、「何うして毎日々々こんなに遅れるのか、何の為の時間表か。」と、待ちくたびれて駅員に喰つてかかつたら、「時間表が無いと、何時間遅れたか分りませんので時間表は必要なのです。」と答えたそうである。ピアード（落し話）になりそうな話である。

全く開拓初期はのんびりしていたものである。又、その停車時間がロンドリーナの場合十五分もあつたので、駅の近くの人は、時間で行かず、汽車が来てから出かけて充分間に合つたのであつた。

更に、サンパウロ方面に行く場合には、コルネリオ・プロコピオ駅でお昼になつて食事がお皿に盛られて売られるのであるが、約一時間の停車で退屈したものであつた。その後ジーゼル車になつて、かなり時間も短縮され、火の粉の心配も無くなつたのであるが、結局オニブス（バス）に客を取られて客車は終いに廃止されてしまった。

先進国は汽車が発達していく時代にブラジルでは反対にすたれて行くので少し淋しい気もするが、大きな国に人口が少ないので致し方がないのであるう。

第二十七話 省三君の一面



或る日市山さんのお父さん（寅太郎氏）が

「沼田さん、まあまあ向かいの子供には困ったものだ。どうしても人の言う事を聞かず、危ない事をしてどうにもならん」

と十才か十二才にもなっていたか、今川省三君の事であった。

きかない事では評判であった。近所の子供を集めてシチリング（パチンコ）の打ち合いをしても全く名手であったらしい。

同年配で遊んだ私の弟らが言うのには、相当高い木に止まっている小鳥などでも、ねらったら殆んど一発で落すというのである。鉄砲でも、「こんなものは、ねらって打つものではない」と言つて、上を向けていて、サッーと、下げてきながら、ポーンと打つと、当っている。横から持つてきて、ポーンと音がすると当っているというのである。

今川明、沢一君ら陸上競技の名選手の弟だけに運動神経がすぐれていたのだろう。

市山氏の目に止まった時も、高い木に猿のように登つたらしい。危なくて見ていられない。と言つて目を離すわけにもいかず、若し枝でも折れて落ちたら大変だ、私の目の前でそんな事がおこつたらどうしようかと思つて少々注意しても、聞かばこそ、一ときするとすぐ次の木の梢の方まで登つていたらしい。余程心配したらしく、私の父に話していた事もあつた。

その後何年か後に省三君も青年になつて来ていたが、又、市山氏が、私の父に、「あの乱暴者の省三君が此の頃は思いがけない立派な青年になつたのには驚いている。」と、言つていた事を思い出す。

この省三君十四、五才の頃ではなかつたか、全くの一大冒険をやつたのであつた。

此の話も市山氏のお父さんから聞いたものである。私の家では五ヶ年間市山氏の畠を作らせて頂いたので話をする機会は多かつたのである。

さて、省三君の最後の冒険であつたかも知れないその冒険とは――

サングリラー区のポスト（給油所）の処から、今のアベニード・リオ・ブランコを、自転車の腰かけに両足をそろえて腰を浮かせて、頭を下げてハンドルを持って下るといふのである。友だちらには、当然そのままの出来る者は一人もいない。

そこで、「見て居れ」とばかりスタートしたのである。下るに従つてスピードは上る、中間を過ぎるとますますスピードが加わる。中間を過ぎた頃から、彼も気が着いたのだらう。

リオ・ブランコ大通りは一直線に川を渡つて、向う側にあつてはいるが、当時の道は川の百五十メートル程手前から左へ急カーブしていたから、このスピードではとてもカーブは切れない。

道の両側はアラメ・フアルパード（鬼鉄線）を四・五段張つたパスト（牧場）のセルカ（柵）である。いやでもセルカに正面衝突である。

その衝突する瞬間セルカを飛び越してパストに転がったの



であった。幸いにして障害物に当らずに土に転がっていたので大怪我にならずに済んだのであったが、一時は気絶でもしていたのか、一キロ程ある市山氏の処迄、誰かが通知に行き、驚いた市山氏がかけてきて見たら、大した怪我でなくて良かったが、「この子の冒険好きには困ったものだ。」と、心配しながら話をされたのを父と一しよに聞いて聞いていたものだ。この自転車の曲乗り？ には驚いた。

その冒険好きの省三君も十四、五才の頃か、青年期に入る頃、急成長して落ち着いた立派な青年になって、再び市山氏を感心させていた事があったが、カブセーロ隣りで市山氏のカリヤドール（作道）を通る機会が多かったからか、度々市山氏の話題に出た。

此の省三君が、ネイブラーガの何時もエスポジソン（農産展）のある隣で、花や苗木商をしている今川商店の主人と納まったが、三年程前に急逝された。六〇年すると少年であった者が相当数、此の世を去ってゆくもので淋しい。この項を書くのに自転車の曲乗りの時どの位の怪我をしたのかと兄の澤一君に聞きに行ったら、私の不在の時の事であろうか記憶にないとの事であった。が、その時、自分も若い時自転車に普通に乗ってはいしたが、ブレーキをかけるだけで下ってやろうと思って、やってみて、あのカーブでみごとに横すべりをして引繰り返った経験があると話された。

兄弟とはおかしなところまで似ているものだと思った。

第二十八話

迷信

日本人として北パラナ土地会社のいわゆる国際植民地に開拓の為に移住してきた初めの人は北海道出身の荒長十郎氏の一家であった。

中央区植民地に二十アルケール（アルケールは二・四二ヘクタール）の土地を購入して移転してきたのであるが、直接には自分の土地に入らず、土地会社が試験的にカフェーを植付けたファゼンダ・コアチー（コアチー耕地）に三年契約をして入り、そこから五、六キロの自分の土地へ通って開拓をしていた。

自分は川辺から開拓を始め、一番カフェーに適する高い方へはカキモリという日本人の家族を六年契約で入れて案外早くから開拓をしていたのである。

此のカキモリ氏の何人目の子供かに、妊娠中の母親の栄養不足か、何の都合でか頭髪の無い全くのハゲ頭の赤ちゃんが生れたのであった。

健康状態も悪かったかと思うが、その事は私は知らないのである。

カキモリ家と私の家とはなんの関わりも無い家なので実際は無く、地主の荒氏が北海道の札幌市の郊外から来たので、同郷のよしみで交際が始まりその荒氏が話された事を思い出して此の章を書いているのである。

そこでハゲで生れた赤ちゃんに心配した両親は、始めの内は、二、三ヶ月もすれば、生えてくるであろうと期待していたが、三ヶ月しても生えてこないで、医者に診察してもらって、健康な母乳の出るようにと母に、又赤ちゃんにも薬を頂いてきて服用するのであったが、半年しても一本の毛も生えて来ないのである。その間、こちらのクラドル（祈禱師）あちらのクラドルと世間の人のすすめで拝んでもらいにも歩いたのであるが、何んの効果もなく月日は過ぎて行くのであった。

二年も近くなった頃か、人の噂さで、眼科の医者で有名なカンピーナス市にハゲを治す名医がいると聞いた母親は、開拓初期で良人の経済の苦しさは良く知っているのであるが、母親の慈悲心で良人に頼んで無理を押してカンピーナスへ診察に赤ん坊を連れて出たのであった。

今日ではバスで一晩の処であるが、当時は汽車で三日かかった筈の遠距離であった。

やっとカンピーナスに到着し、まずペンソン（安旅館）に投宿した。

ところがこのペンソンの主人が日本人で親切に來た理由を聞いてくれるので、一通り事情を話し、明日は頼りにして來たお医者さんに行くための道や乗物などのお世話を頂きたいと頼むと、この主人、

『カンピーナスへは眼の治療にくる人は多いが、ハゲを治療に來た人は始めてだ。眼でなければ、大變に評判の良い

クラドルがいるので、先ずその人に祈って戴いて、効果が無い時にお医者者に診てもらおう事にした方が良いでしょう』と、言われるので、

「クラドルには何人にも祈って頂いたのですが何んの効果も無かったのでわざわざ出てきたのですから。」

と、断ると、

「あちらの御医者さんにかかってもだめだったのですから、ここはもう一遍だまされたと思つて二、三日このクラドルに祈ってもらいなさい。お医者さんはその後の事にしましょう。」

と、無理に押し切られてその翌日からクラドルにお祈りをしてもらう事になつて三日目かに、クラドルがお祈りした後には子供の頭を良く調べていて、

「奥さん毛が生えてきました。よく見てごらんなさい、コレ、これは毛ですよ。一ミリか二ミリの細い細い白とも黒とも分らないが、これは確かに毛です。さあもう安心です。神さまがお願いを聞き届けて下さいました。」

と、言われるので良く見ると微かに毛らしいものが見える。毛の生え始めとはこんなものかも知れないと思つていると、クラドルは、これで心配有りません。後は私が毎日お祈りしておきますから、家に帰つて家族を喜ばせてあげなさいと言われて、帰宅したのであるが、生え出すと忽ち延びて来て間も無く普通の子の様になつた、と、いうのである。

然し此処で考えたいのは、人間の心である。こうして

二ヶ年近くも誰も、どうする事も出来なかつた事を、最後にカンピーナスのクラドルが祈る事によつてやつと生えてきて喜んだのも束の間に、待てよこれは、クラドルの祈りがきいたのか？ はたまた長い間に何人ものお医者者に診て頂いて服用した薬が此の時に効果を現わしてきたのかも知れんと思う心も起きてきて、カキモリ夫妻にしてもどちらが利いたとは言えんという事であつた。

このように世の中では祈祷師とか易者という方々のする事、言われる事、総てを迷信だと言い切れないものもあるので、処世上、気を付けなければならぬ。

次のようなものには注意の事。

私の父の話であるが、近所にいた祈祷師は、お祈りが進んで来るとミコ（神様に仕える女の子）が「ボツボツ神さまがお出ましになります。」と、いつて神壇のお水を、飾つてある花ビンに注ぐと、間もなく花ビンが、がたがたとゆれだす。「さあ神様のお出ましです。」という事になるのであるが、或る日、ゆれすぎてその花びんが引繰り返つたのである。倒れておれた花ビンの中からドジョウが四、五匹現われた。神さまのお出ましの仕かけが、花びんの中にドジョウを入れて置いて、ミコが水を足すふりをして少しお酒でも注ぐのでドジョウが驚いて動きだして、花がゆれる仕かけ、こんなにはだまされないようにしなければならぬ。

第二十九話

喧嘩

或る日庄司君に会うと、

「今裁判所の帰りだね、隣りのTに困っているのですよ、日本人にこんな悪い人がいるとは知らなかった。」

と、ほとほと困った様子で喧嘩の始末を話すのであった。

庄司氏も隣りのT氏も既に隣り合わせて家を買って住む様になって早二十年近い年月を過ごしている仲であつて、今迄は何事もなかったのであるが、庄司君が車を買ったので家の横に外屋をおろしてガラージを作り何事もなかったのであるが、それから暫くすると、T氏の家でも車が欲しくなつて、気がついてみると、T氏の家はダツタの中心に建ててあり、両側共二米しかあけてないので車を入れてもモトリスタ側のドアがあげられないのであつた。

そこで隣りの庄司氏の家を見ると、家がT氏の側に細長く建ててあつて反対側にはらくらくと車を止めて尚両側のドアをあげて乗り降りが出来るのであつた。

T氏はその様子を見ていながら、待てよ、それにしても少し変だ、隣りの家はなる程、少し細長く造つてはあるが、それにしてもダツタの中が少し広い様だと気がついて、家に帰つて自分のダツタの中と隣のダツタの中を測つて見て驚いた。自分のダツタは十二m、隣りのは十二m半

あつたのである。

そこでエスクリツラ（書類）を出して調べると、エスクリツラには十二m半と書いてあつたのである。もう半m広くなれば車のモトールの部分を家とムーロの間に入れてモトリストの側もドアがあくし、反対側は庭なので問題はないのであつた。

そこでT氏の思つた事は私の半mは隣りが喰いこんでいるに違いないと早速談判に行くと、庄司氏は、「そんな事はない。私のエスクリツラも十二m半で、買った時に確かめてある。あなたは何故買った時に確かめなかつたのか……」と、反対に説教をされた。

然しT氏は何んとしてでも此の自分の半mを獲得しないと車が入らないので無理を言う事になつた。

「私は自分の権利だから此の半mはもらいます。あなたは、向う隣りに半mずらしてもらつたら良いでしょう。」

と勝手な事を言つて翌日からペドレーロ（左官）を雇つて、有つたムーロ（塀）を壊して半mずらして新しいムーロを作ってしまったのであつた。

治まらないのは庄司氏である。話し合いにはならないので、温厚な氏も腹にすえ兼ねて弁護士を頼んで裁判所に訴えたのであつた。

その裁判中の一日私に会つて以上の様ないきさつを説明されたわけである。

説明を聞き乍ら、困つた事がおきたものだと思ひながら

も、何の解決策も浮かばないまま別れたのであったが、一年程して再び逢う機会が来たので、その後どう進んでいるかと尋ねてみると、「それがね」と、思いがけない返事が返ってきたのであった。

それは或る朝、庄司氏が仕事に出かける前トマカフェーを妻と二人でしていると、妻が

「あなた、隣りとのムーロの事、もうけんかは止めた方がいいんじゃない。半mムーロが此方に近くなったけど、それは、朝起きて窓をあけた時、ムーロが少し近くに有るというだけで、家との間に何も植えるわけでもなし、此方のガラージに関係はない事だし、それで隣りが車を買えて喜んでいるのだから、此方で半mはあきらめた方が良く思うよ。」

と切り出すと、庄司氏も

「そうか、隣りが勝手な出方だから腹が立ったが、ムーロが半m近くなっても、別に生活にかかわる事でもなしそうしよう。」

と、早速隣りを訪ねて、その旨を通じ裁判所の方も取り下げた。

「ところが沼田さん」と、次の様な話になったのであった。

T家では市中にフルータリヤ兼キタンド（果物・野菜）を盛大に営業していた。それで、今日は珍しい品物が入った、今日きれいな野菜が残ったのでと、週に何回も届けて

くれる始末。考えてみれば大変に良い人達である。

「何故此の様な良い人達を、こんな悪い日本人がいるものかと思つて裁判沙汰までしてけんかしていたかと後悔しているのですよ。」

と話されるのであつた。

町で十二m半の敷地で半mとられる事は大変な事であるが、それで隣りも車を買えて、喜んでいるのだからとあきらめる事にしたら、仲良く暮される事になつて来たというが、美しい話である。

人間の生活では他人の幸せを願う心がおきると、次第に此方の幸せが出来るものと教えられていたが、その良い見本をみせられた思いがした。

第三十話 男泣き



それは一九七五・六年頃の事であったかと思う。コチヤ産業組合が健在で、各地方の単協が独立採算で経営されていた時代の事である。

我が北パラ単協は故小笠原一二三氏が万年理事長で頑張っていた。理事にはカルロポリスの山本勝男氏、アサイの岡本壮平氏等が中核となって運営されていた。その他の理事としては、五十嵐政雄、福島尊文氏等が居られたかも知れない。

次第に単協の経営が傾いていくので理事会は従業員の尻をたたき、尻をうたれた従業員は、責任は本部の販売が悪い、購買部の仕入が高い云々と言いつくす。その結果、がたがたと、ゆれてゆれて理事会も、従業員の幹部達も、

こんな本部のあり方では、どうにもならん、一同で本部へどなり込もうという事になった。私は単協監事の職にあつたので、聞き役としてついて来いという事で同道した。

ピニエーロスの本部に到着して会議の時間迄、表でブラブラしていると、近郊単協の顔見知りの理事の二、三人に会った。

『今日は中央会へなぐり込みだそうですね、大いにお願ひしますよー。』

等と、言われる。様子は知れているのであつた。

いよいよ時間が来て二階の会議場に入った。

中央会側からは、井上会長、谷垣専務、小川会計、松前氏はC R C R（金融部門）代表であつたのかどうかは忘れただが出席していた。それに販売、購買部長も出ており、大勢なので会議室は手一杯にテーブルを四角に拡げて、やつと坐れるという大人数であつた。

一同が着席すると専務の谷垣氏の簡単な挨拶に引続いて、氏から「早速皆さんの御不満を伺いましょう」という事になった。

それで誰から、どの様な順であつたかは覚えていないが、数名の幹部従業員並び全理事から大変筋の通つた不満が次々とぶちまかれたのであつた。

私は唯聞き役と言う事でじつと聞いていたのであるが、この理路整然とした不満では、中央会役員も大変であろうと思わせられていた。

一通り不満が終ると谷垣専務から一件一件に付いて相当

数の問題に付いて返答が有った。

それを伺って私は驚いた。当方からの不満に対して、一つ一つの問題に中央会の取った説明に対して一口も反撥出来なかつたのである。

又、専務の責任外の問題に対しては、その責任者が説明したが、これに対しても同じであつた。

私はじつと聞いていて、やはり中央会は理事も職員も一級上の人達の居る処だと思つた。

中央会側の返答は終つた。単協側からの少々の反論は有つても、理路整然と説明されると、中央会側には一つも落度は無いのであつた。会場は話声なく静まつた。

と、その時、小笠原単協理事長が立ち上つて谷垣専務に抱き付いて

「それでは、これからどうしたら良いのでしょうか。―。」
と、言つて泣き出した。

谷垣専務も

「私の力不足で申し訳ない―。」

と、言つて、泣き出した。

男泣きとはこういうものか、― トップの人は真剣に取り組んでくれているのだ。

私も一組合員として勝手な事を考えてはならないと思つたのであつた。

あとがき

私も四月に七十九才を迎え、いよいよ八十才に向う事になりました。親、きょうだいでは初めての八十才ですが、案外に健康ですから、私の昔話も、あと何冊か、信ちゃんの移民シリーズとして発表してゆきたいものと念願しております。

若し命が有れば最後には『赤土と移民』と題して、国際植民地の先駆者の横顔伝記を短文で百名分一冊に纏めたいものと、筆をとっております。その調査中に、草創期の入植者で当時既に成功していて、三〇アルケール、四〇アルケールと、一般人の五倍も十倍もの土地を購入して入植する人でさえ、家具らしき物の無い事で、当時の小さなトラックに、二家族三家族と便乗してムダンサをして来た人達のいる事が解りました。

移民が洋服筆筒や戸棚を据えるようになるまでにも相当な年数がかかっているのだ。我が家の洋服筆筒も、兄の結婚の時、姉さん（兄嫁）が持参してくれたのが始まりではないかと、考えさせられるのであります。

そうした一世の辛酸の中で、今日の二世、三世が育てられて、早くも現在の発展である。ロンドリーナ市でも、日系の医師が二百名から開業しているので頼もしい。

第五部は、『ピッショ（砂のみ）と移民』と、題して、あれ程いじめられながら、今は忘れて、毎晩の日課で

あつたビツシヨ掘りから話を進めてあります。発行されま
したら、つづけて御愛読下さいます様お願い致します。

これを書いた後に福島氏からの序文を頂きましたが、氏
は二十回もムダンサをされた人を何人か知っていると
ですが、そうした苦勞の結果今日の有る事を忘れてはな
らないと思う者です。

某氏はパトロンの無理で穂の出揃つた稻を刈り取る事も
出来ずにムダンサした事もあつたという事でしたが、移民
のムダンサは大きな話題の一つでした。

この本が出版されると亦色々な話題を知らせて下さる人
が居るでしょう。楽しみにして居ります。

既刊 第一部 カフェーと移民 発行1996年4月
第二部 ビンガと移民 発行1996年9月
第三部 毒蛇と移民 発行1997年3月

第四部 ムダンサ（引越し）と移民

発行 1997年10月 初版発行

著者 沼田 信一

SHINICHI NUMATA

Rua Raposo Tavares, 828 - Londrina
Est. Paraná-Brasil-Caixa Postal 860
CEP 86010-490 - Tel:(043)322-1740

印刷 Editora Gráfica Topan-Press Ltda.
Rua Muniz de Souza, 655 - S. Paulo
Tel:(011)279-5522 Fax:(011)279-3975



著者 沼田 信一 略歴

出生 大正七年（1918）四月十五日

北海道札幌市北二条東一丁目に生る

学歴 札幌市第一高等小学校卒

渡伯 昭和八年（1933）7月サントス上陸、アリゾナ丸

直接海外興業株式会社開発のセッテ・バーラス植民地マン
パウロ区へ入植、翌年5月パラナ州ロンドリーナ市郊外中
央区へ移転、1942年フレーザ区へ移転、1950年ローランジ
ャ郡内へ移転、1953年ロンドリーナ市内に移り今日に至る。

職業 渡伯後一貫して農業